

第4回教育展

先生を目指した女性たち

—京都府女子師範学校の歩み—



第四回教育展 「先生を目指した女性たち—京都府女子師範学校の歩み—」 に寄せて

植山 俊宏(京都教育大学教育資料館長)

私事ながら、先日、盆に帰省した折、祖母の絵を見ました。弟が人の上半身ほどであろうかという二枚の花の水彩画を表装していました。私たちは祖母が絵を描いていたことを知りませんでした。祖母は大分県女子師範学校の卒業生です。師範学校在学時から初任期にかけての作品だと思われました。二人して昭和初年の女子師範学校の教育の豊かさにひとしきり思いを馳せました。祖母は師範学校出の祖父と結婚し、職業婦人(当時のことば)として、四人の息子を育てながら、教職を続けました。息子のうち三人が教員になりました。

第4回の教育展は、「先生を目指した女性たち—京都府女子師範学校の歩み—」をテーマに開催します。教育資料館が主催し、附属図書館が共催する形を採ります。全国の師範学校の中で古い部類に入る京都府師範学校の歴史にはさまざまに光が当てられています。附属学校も同様です。が、意外に師範学校と並行して女子師範学校が設けられ、教員養成の教育が行われていたことは知られていません。師範学校内に女子部として置かれていたものが、1908年に女子師範学校として独立し、その後10年を経て、現在の附属桃山学校園の地への移転も果たしています。最終的に、三十数年を経て太平洋戦争中の1943年に府立から官立に移管され、その機に京都府師範学校と京都府女子師範学校は統合され、再び男子部、女子部となり、女子師範学校は消滅することになりました。

本展は、この時期の女子師範学校の歴史について、所蔵の資料、新規発掘した資料などを織り交ぜて、できる限り当時の実相に迫っていくことをめざしています。

女子師範学校の特色の一つとして、「郷土資料室」が設けられていたことが挙げられます。昭和初期から一定期間盛り上がりを見せた郷土教育の流れを受けて、京都府女子師範学校は、京都府内の郷土教育をリードしようとさまざまな取り組みを行っていました。これも今回の教育展の重要点の一つとなっています。

今回の教育展を開催するにあたって、本学の教育資料館の資料だけでは不十分でしたが、当時の新聞記事、京都府内の資料館所蔵の資料、女子師範学校の卒業生の方の資料など、さまざまな資料を入手すること、あるいは貸与を受けることができました。これらの生資料も展示し、ご参観のみなさまのお目に掛けたいと考えています。そして、今も京都教育大学として脈々と続く京都府の教員養成の流れの一つに京都府女子師範学校があり、重要な働きをしていたことをご理解いただきたいと願っております。

快く貴重な資料をお貸しくださった方々に、記して厚く御礼申し上げます。

〈表紙の画像〉上から

- ・京都府女子師範学校校旗
- ・集合写真:京都府女子師範学校生徒
- ・西村美代子近影
- ・京都府庁文書「師範学校」
- ・京都府女子師範学校郷土研究室『郷土研究』

〈裏表紙の画像〉

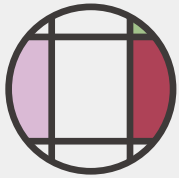
- ・女子師範・桃女写真 1939年(昭和14)
※桃女=京都府立桃山高等女学校

【凡 例】

- ・本冊子は、2022年(令和4)11月11日(金)から2023年1月10日(火)まで、京都教育大学附属図書館にて開催する、第4回教育展「先生を目指した女性たち—京都府女子師範学校の歩み—」の解説付き図版目録である。
- ・本企画展は京都教育大学教育資料館まなびの森ミュージアムが主催し、同大附属図書館が共催する。
- ・総論の執筆は中村翼(社会科学科准教授、教育資料館次長)、各章の展示資料解説等の執筆は中村、神代健彦(教育学科准教授、教育資料館運営委員会委員)、樫下達也(音楽科准教授、同委員)が行った。
- ・本企画展の開催にあたり、下記の機関および各位には多大な協力を得た。ここに記して謝意を示したい。

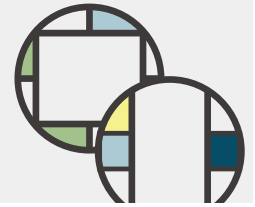
(敬称略)

京都府立京都学・歴史館
宇治市歴史資料館
京都府立桃山高等学校
齊藤尚志
井上えり子(京都教育大学家政科教授)



先生を目指した女性たち

—京都府女子師範学校の歩み—



はじめに

第4回教育展は、「先生を目指した女性たち—京都府女子師範学校の歩み—」と題して、京都教育大学のルーツの一つである戦前の京都府女子師範学校（名称は、何度か変更されます）について、そこでの教育や地域社会との関わり、卒業生の足跡等を中心に紹介していきます。

同校の歩みは、『京都教育大学百二十年史』(1-1：図版は省略)をはじめとする本学及び附属学校園の刊行物のみならず、師範学校制度や女子教育史に関する学術研究でも言及されてきました。本展では、これらの成果をふまえつつ、新たに本学教育資料館や京都府立京都学・歴史館等に所蔵されていたり、女子師範学校の卒業生関係者から提供された諸資料を活用することで、京都府女子師範学校の実態により一層迫っていきたいと考えました。

なお、本総論のうち、第1・2章は主に『京都教育大学百二十年史』によっていますが、本文には逐一引用した旨を記してはいません。ただし、第3章以下では、同書に基づいた部分があれば、他の先行研究によった場合と同様、引用した旨をカッコで注記しました。

第1章 京都府師範学校女子部の誕生

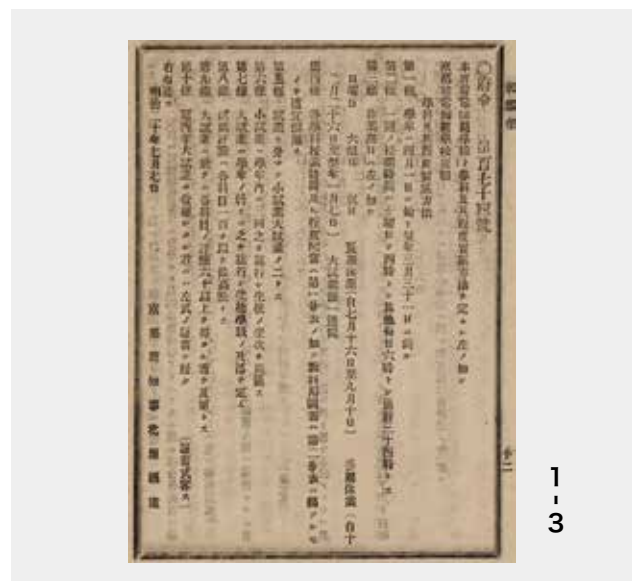
(1) 京都府師範学校の設立

日本における近代的教育制度は、1872年(明治5)の「学制」によってスタートし、その後の試行錯誤を経て、1886年に「小学校令」「中学校令」「師範学校令」「帝国大学令」の公布をもって学校の体系が確立されました。小学校(尋常小学校)での学びが義務教育(当時は4年間)となったのは、この時からです。それと同時に、学校教員は府県立の尋常師範学校が養成すると定められました。

この頃の京都府下の動きを見てみましょう。1876年6月2日には京都御所内に仮校舎を設けて京都府師範学校が開かれ、小学校師範学科が置かれています(1879年には、京都市上京区下立売釜座に新校舎が完成)。これが京都教育大学の前身です。そして「師範学校令」(1886年)をうけ、同校は「京都尋常師範学校規則」(1-3)を整備し、本格的に体制を整えていきました。1893年に定められた「京都府尋常師範学校教則」(後述)によれば、生徒全員は寄宿し、給費(生活費)が支給されるかわりに、卒業後に一定期間は教員として就任することが義務づけられています。また、学校の運営費用は京都府の負担とされたため、京都府会ではしばしば師範学校の運営のあり方が



1-2



1-3

議論され、府庁には関連資料が簿冊として保管されました。現在では「府庁文書」（京都府庁文書：重要文化財）の名称で、京都府立京都学・歴彩館に所蔵されています（1-2）。本展では、「府庁文書」を多く利用していますが、公文書等を大切に保存・保管してきた人たちがいたからこそ、私たちは100年以上も前の学校の様子を知ることができるのです。

(2) 師範学校女子部の誕生と府会

「京都府尋常師範学校教則」（1-4・1-5）で注目すべきは、男子部と女子部とに分かれていることで、この女子部が女子師範学校の前身となります。「師範学校令」の公布に先だって、1886年（明治19）1月に京都府女学校に置かれていた「師範学科」（女学校規則：1-6）が京都府師範学校に移管され、女子部が設置されました。またこれと同時に、女学校附属小学校・幼稚園も、京都府尋常師範学校に移管されることになりました（附属桃山学校園のルーツ。なお、本展では附属学校園については他日を期すこととし、割愛します）。

「京都府尋常師範学校教則」（1-4）によれば、女子部の定員は50名で、男子部のちょうど半分です（第1条）。また、この時のカリキュラムは、男女それぞれで異なり（第6・7条）、「教授上注意すべき要項」として女子のことが特記されています（第8条）。実は1887年制定の「京都尋常師範学校規則」（1-3）では男女のカリキュラムに大きな違いはありませんでした。それに対して1893年に制定されたこの学則では、女子部で理科系科目が縮小した反面、家事の規程が細かくなったり、修学年限が4年から3年に短縮されて、男女間の格差が目立つようになります。また女子生徒の給費は男子生徒よりも低額に定められました。

京都府師範学校女子部は、設立段階から多くの困難に直面しました。その一つは、予算や議案の修正・否決などを通じ、師範学校の運営に大きな発言力を持っていた京都府会での反対論です。官選の府知事・県令と民選の府県会との対立・妥協・協調が、明治時代の地方政治を規定したことはよく知られますが、京都府下では、師範学校への女子部設置をめぐり、府会が強く反対論を展開しました（尾崎1990）。反対の主たる理由は、「民力休養」であり、具体的には女子部設置による府財政の圧迫が懸念されました。実際、女子部の設置は、これを理由に一次否決され、最終的に大幅な予算の削減を前提に認められたという経緯を持ちます。

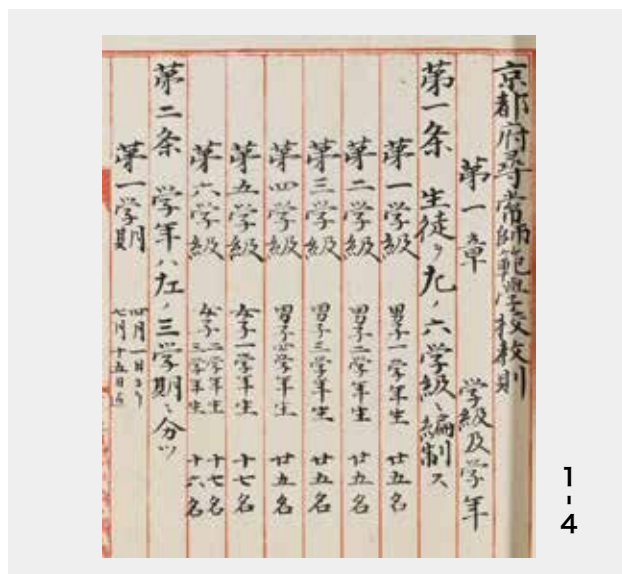
しかし、府会での議論を子細にみると、単なる民力休養論にとどまらない、この時代特有の女性教員への認識が見て取れます。明治20年代後半に府会を席卷した女子部廃止論を見ましょう（伊藤1990）。京都府尋常師範学校に女子部が設置された明治20年代前半には、「師範学校令」が女子生徒の

定員規程を設けていたこともあり、全国各地の師範学校で女子部が設置されています。ところがその後に一転、定員規程が取り下げられた（つまり女子生徒の受け入れが義務でなくなった）こともあり、明治20年代後半に、各地の師範学校「女子部」は危機の時代を迎えます。能力面で男子に劣るとされた女子をあえて教育対象とする必要はないという理屈です。京都府会でも、1892年、尋常師範学校女子部の廃止に関する調査委員会が設置されています。

その結末や、いかに。結論からいえば、女子部廃止論は府会全体での合意を調達できませんでした。その理由の一つは、女子を小学校教員とする「メリット」が一定程度認知されたことです。廃止に反対する議員は、主として二つの「メリット」を強調しました。第1は、幼少児教育・女子教育における女性教員の適性論。第2は経済面での合理性で、女性教員への給与が男性教員のそれよりも廉価だったからというものです。これらはいずれも、現在では通用しない論法ですが、政治家のみならず女子部設置に賛同する教育関係者にも支持された見方でした（1-13）。そして結局、女子部廃止の是非をめぐる意見の対立があるなか、女子部廃止派が構想していた京都府高等女学校（男子でいう初等中学校〔就学年限は3年〕に相当／後述する桃山高等女学校とは別）に女性教員養成を委ねる方針が実現困難となったことで、女子部の廃止は回避されることになりました。

1-4・1-5 京都府尋常師範学校教則

本教則の第1条では、第1～第4学級を男子、第5・6学級を女子に割り当て、それぞれ学級の定員を定めています。第5学級が女子の1年生、第6学級が女子の2・3年生とされています。第8条は、男女別に教授上の注意を各科目ごとに記しています。くわしくは総論を参照して下さい。（中村）





1-5

1-6 府令甲125号(女学校規則改正)

1882年(明治15)に出された本府令からは、京都府女学校が普通学科と師範学科を持ち、「女紅場」の機能を引き継いだものであることが知られます(写真は府令を筆写したもの)。「女紅」とは、手芸・裁縫などの女性の手仕事のこと、明治初期には、「女紅場」が女子教育を担いました。(中村)

1-12 集合写真:京都府師範学校(男女)

この写真の裏面には、「明治廿六(乙未)年十一月/天長節当日撮影」とあります(〈 〉内は割書。/は改行を示します)。天長節は天皇誕生日のこと、明治天皇が誕生した嘉永5年(1852)9月22日を太陽暦に直した月日(11月3日)を指します。師範学校の教官と男女生徒(概ね全員)が改まった服装で撮影にのぞんでいます。(中村)



1-6

1-13 「女子師範学校ノ必要性ニツイテ」

上野家は、江戸時代には庄屋、明治時代以降は府会議員・帝国議會議員を輩出したいわゆる地方名望家です。同家には、「府庁文書」には漏れてしまっている京都府の行政文書を含む、同家が集積した膨大な資料が伝来し、「上野家文書」と総称されています(現在、京都府立京都学・歴史館に寄託)。本文書は、1892年(明治25)に京都府下の有力な教育関係者が京都府会に対し、師範学校における女子部廃止論への反対を表明したものです。その理由として、①幼児教育・女子教育への適正、②幼稚園の保母は女性教員の資格であること、③給与面での男女の違い、④裁縫・唱歌については師範学校の女教員養成が途絶したなら専科教員を必要としてしまい、かえって経費がかさむことが、挙げられています。提出している写真は本文書の後半部分の一部です。(中村)



1-12

見。一女子師範學校。二女子師範學校。三女子師範學校。四女子師範學校。五女子師範學校。六女子師範學校。七女子師範學校。八女子師範學校。九女子師範學校。十女子師範學校。十一女子師範學校。十二女子師範學校。十三女子師範學校。十四女子師範學校。十五女子師範學校。十六女子師範學校。十七女子師範學校。十八女子師範學校。十九女子師範學校。二十女子師範學校。二十一女子師範學校。二十二女子師範學校。二十三女子師範學校。二十四女子師範學校。二十五女子師範學校。二十六女子師範學校。二十七女子師範學校。二十八女子師範學校。二十九女子師範學校。三十女子師範學校。三十一女子師範學校。三十二女子師範學校。三十三女子師範學校。三十四女子師範學校。三十五女子師範學校。三十六女子師範學校。三十七女子師範學校。三十八女子師範學校。三十九女子師範學校。四十女子師範學校。四十一女子師範學校。四十二女子師範學校。四十三女子師範學校。四十四女子師範學校。四十五女子師範學校。四十六女子師範學校。四十七女子師範學校。四十八女子師範學校。四十九女子師範學校。五十女子師範學校。五十一女子師範學校。五十二女子師範學校。五十三女子師範學校。五十四女子師範學校。五十五女子師範學校。五十六女子師範學校。五十七女子師範學校。五十八女子師範學校。五十九女子師範學校。六十女子師範學校。六十一女子師範學校。六十二女子師範學校。六十三女子師範學校。六十四女子師範學校。六十五女子師範學校。六十六女子師範學校。六十七女子師範學校。六十八女子師範學校。六十九女子師範學校。七十女子師範學校。七十一女子師範學校。七十二女子師範學校。七十三女子師範學校。七十四女子師範學校。七十五女子師範學校。七十六女子師範學校。七十七女子師範學校。七十八女子師範學校。七十九女子師範學校。八十女子師範學校。八十一女子師範學校。八十二女子師範學校。八十三女子師範學校。八十四女子師範學校。八十五女子師範學校。八十六女子師範學校。八十七女子師範學校。八十八女子師範學校。八十九女子師範學校。九十女子師範學校。九十一女子師範學校。九十二女子師範學校。九十三女子師範學校。九十四女子師範學校。九十五女子師範學校。九十六女子師範學校。九十七女子師範學校。九十八女子師範學校。九十九女子師範學校。一百女子師範學校。

京都府教育會員有志總代
 長尾時春 岡本清來
 北郎立太郎 中山熊力
 根本吉太郎 櫻井丈太郎
 奧三郎 玉川直樟

上野正行 殿

1-13

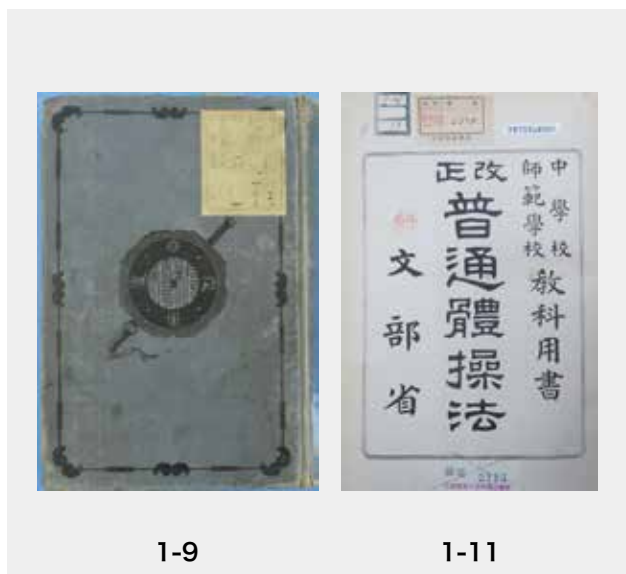
科目	書名	冊数	出版年月	著者	出版社
學科	學科圖書名	二冊	明治五年八月	重野宏輝	小村書店
修身	修身教育史	二冊	明治五年五月	文部省圖書課	文部省
教育	教育學	一冊	明治五年五月	大瀧基太郎	源辰三郎
家事	細君之友	一冊	明治五年五月	井上勤	大岡
習字	習字之友	一冊	明治五年五月	足立寛	日本文字社
圖画	習字圖画帖	四冊	明治五年五月	藤田久道	津田圖書社
音樂	小學唱歌集	一冊	明治五年五月	村田浩藏	源辰三郎
體操	體操法	一冊	明治五年五月	小野潤之助	津田圖書社

1-7

科目	書名	冊数	出版年月	著者	出版社
國語	土佐日記	一冊	明治五年五月	紀貫之	住持氏名
漢文	十六夜日記	一冊	明治五年五月	阿佛尼	古田家好
歷史	新編日本歷史	七冊	明治五年五月	曾先之	大槻啓之
地理	新編日本地理	三冊	明治五年五月	馬場健	大槻啓之
數學	算術	二冊	明治五年五月	高橋豐之	源辰三郎

1-8

【コラム】 師範学校女子部で使用された教科書



1-9

1-11

京都府尋常師範学校では、男子部・女子部それぞれで使用される教科書が定められていました。「京都府尋常師範学校教則」(1-7)はそのリストです。また、女子部の教科書については、この直後に「教科用書追加上申書」(1-8)が作成され、国語・歴史・数学・理科等が追加されました。京都教育大学附属図書館には、京都府師範学校で使用された教科書がいくつか所蔵されています。以下では、「京都府尋常師範学校教則」および「教科用書追加上申書」に記された女子部の教科書を3点取り上げ、紹介します。(中村)

1-9 林善助『新体日本歴史』上

「国史」教科書とされたのは、1888年(明治21)発行の『新体日本歴史』(上・下)です。上巻は300頁(平安時代まで)、下巻は600頁を超えるボリュームを持つ本書では、大きく二つの目的が掲げられています。一つは、欧米の「科学」的な歴史学にならない、人類が今にいたる社会を形成してきたその原因を考察すること、もう一つは、初学者の学習用として、「愛国の気」「道徳ノ心」を養い、「智力想像力等」を育てることです。そうした観点から、はじめに日本の地理・制度・風俗を簡単に説明した後、神代を含む「上古」、「中古」(大化の改新～戦国時代)、「近古」(江戸時代～明治維新)の歴史が叙述されています。(中村)

1-10 文部省音楽取調掛編纂『小学唱歌集』(全3巻)

日本初の音楽教科書。全3編が1882年(明治15)～1884年にかけて発行されました。当時は西洋音楽理論に基づく「作曲」ができる日本人の育成が途上であったため、掲載された楽



1-10

曲のほとんどは外国曲の旋律に日本語詞を付したものでした。例えば現在《蛍の光》として知られる曲(当時の曲名《蛍》)も掲載されましたが、これはスコットランド民謡の旋律であり、また《むすんでひらいて》として知られる曲(当時の曲名《見わたせば》)は讃美歌の旋律が採用されました。(榎下)

1-11 坪井玄道・田中盛業編纂『普通体操法』

1887年(明治20)文部省編輯局発行の中学校及び師範学校用の体操教科書で、本展では、その三訂版で1903年刊行のものを展示しています。坪井玄道(1852-1922)は当時、文部省直轄の体操に関する師範学校という性格をもつ体操伝習所の教員でした。伝習所発行の『新撰体操書』と『新制体操法』を参考にしつつ、坪井ら自身の実地経験をふまえて編まれました。「普通体操」とは「軽体操」とも呼ばれ、球竿や棍棒など軽手具を用いて行われるもので、木馬・鉄棒など設置器具を使用する重体操と区別されました。後に「兵式体操」に対して「普通体操」と呼ばれるようになりました。「普通体操」は明治期の学校体操の主流であったと言われます。(榎下)



第2章 女子師範学校の開設と地域

(1) 女子師範学校の開設

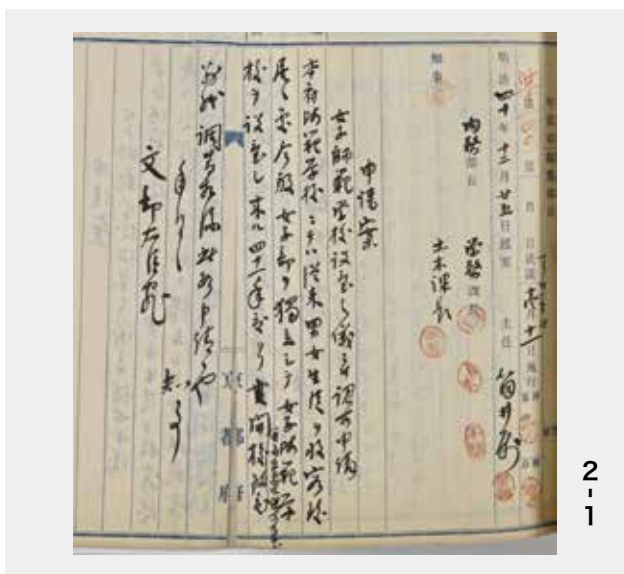
1897年(明治30)頃になると、全国的に小学校への就学率が高まり、それに伴って小学校教員が不足することへの危機感が高まりました。そのなかで1897年に「師範教育令」が改正されると、京都府でも、給費に頼らない生徒(「公費生」に対し、「私費生」といいました)の在籍を認めて生徒定員を増大させるなど、師範学校の「入り口」が広がられました。ちなみに、この時、「京都府尋常師範学校」は、再び「京都府師範学校」へと名称を変更し、その翌々年には愛宕郡上賀茂村小山に校舎を新築し、そこに移転をしています(ここが現在の附属京都小中学校に相当します)。

変化は、男子部だけではなく、女子部にも及びました。1904年には、定員が60名から120名に倍増し、しかも半数にあたる60名が私費生とされました。このことは、給費支給がなくとも師範学校に入りたい／入れたいと思う生徒や親が増えたことを物語っています。そして1908年には、いよいよ京都府師範学校女子部が、京都府女子師範学校として独立を果たします。

こうした変化の背景には、女子部特有の事情もあります。京都府教育会の論説「本府師範学校的女子部を拡張すべし」(2-6)を見てみましょう。この論説からは、教員不足の廉価な解消策として女子を起用するという従来からの考え方にくわえ、師範学校での教育を「家庭婦人たるにも社会的婦人たるにも共に適当」とする発想を読み取ることができます。この時期には、都市部を中心に、主に結婚前の女性が職業を持つことを肯定的に捉える雰囲気が強まりつつありました。実際、京都府下の私立女学校でも、教員養成課程を設置する動きがみられま

す。これらは、教員養成教育の人気を示すとともに、師範学校の入学希望者が、以前とは違い教員志望者一辺倒ではなくなりつつあること、すなわち女学校希望者に準じる性格を帯びつつあったことを示しています。

1908年に開設した京都府女子師範学校の姿に迫っていきましょう。まず、手がかりとなるのは、「京都府女子師範学校学則」(2-2)です。定員は一部320名、二部40名の計360名で、女子部時代よりも規模が拡大しています。一部とは高等小学校卒業資格で入学するもので4年課程、二部は高等女学校を卒業したか、それに準ずる学力があると認められた者を対象にしており1年課程とされました。公費生・私費生問わず、全寮制が原則です。その他、この資料からは、当時のカリキュラムもわかるのですが、これは次章に譲ります。また、校旗や校訓も新たに制定され、京都府師範学校(かつての男子部)とは異なる校風作りが目指されていたこともうかがえます(2-3・2-7)。



2-1 女子師範学校設置の儀に付き認可申請

京都府師範学校の女子部を京都府女子師範学校として独立させ、1908年度(明治41)より開校することにつき、京都府知事から文部大臣に宛てて認可を申請したものです。写真は一部加工しています(連続するページを結合)。(中村)

2-2 京都府女子師範学校学則

京都府女子師範学校の開校に伴って制定された学則です。本ページでは、主に定員のことが定められています。続く部分では、カリキュラム(第3章で触れます)や入試、寮の規程などが詳細に記されています。(中村)

2-3 京都府女子師範学校校旗(写真)

校旗の意味するところは、初代校長の武井悌四郎によれば、「地質は赤地精呉織にして上部の旗竿に偏したる方に白く鏡を染め抜き、さらにその上部に偏して紫草を染め、それより白色の

光線五個を射出せしめたるものなるが、この鏡は女子の魂とも称すべきものなれば校訓中の誠実を意味せしめ、紫草は新校舎の紫野なるにちなみ、しかもその花が貞淑の精神を有するをもって校訓中の高潔なる趣味にちなみ、しかも光線は剛堅を意味せるがゆえに、校訓中のそれにゆかりせしめたるにあり」ということです(出典：2-7「女子師範教化近事」)。(中村)

2-4 村雲尼公猷下台臨記念アルバム

このアルバムは、「大正六年二月二十日村雲尼公猷下台臨之際献上セシ写真副本」との注記から、1917年(大正6)に伏見宮邦家親王第八王女の村雲日栄(1855-1920)が京都府女子師範学校を訪れた記念に作成されたものとわかります。当時の校舎や生徒の様子を伝える貴重な資料です。ここでは校舎と授業(理科)の風景の写真を掲出しました。(中村)



2-4



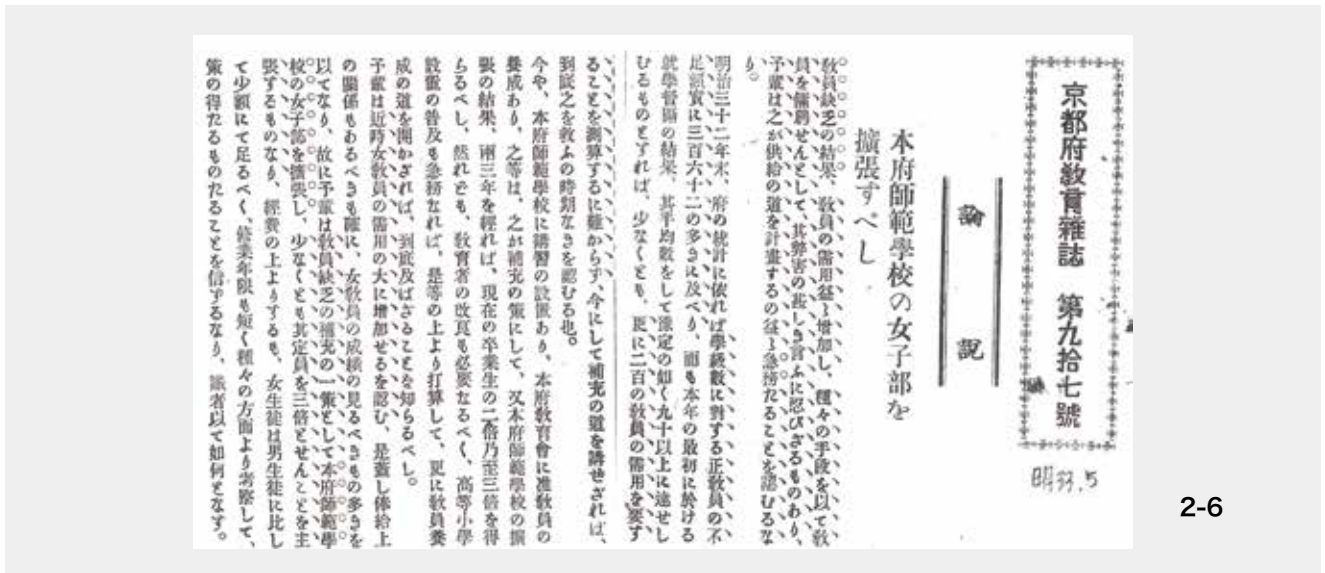
2-5



2-7



2-8



【『京都日出新聞』の女子師範学校記事】

- 2-5 「女子師範学校設置の利害」 1902年(明治35)1月20日
- 2-7 「女子師範教化近事」 1908年(明治41)12月26日
- 2-8 「新粧の女子師範」 1910年(明治43)4月5日

『京都日出新聞』は、1879年(明治12)に創刊された『京都商事迅報』を前身とし、数度の改名の後、1897年にこの名称となりました。その後、1942年(昭和17)に『京都日日新聞』と合併して、『京都新聞』として現在に至ります。ここでは、同紙の京都府女子師範学校関係の記事を掲載しています。2-5は、女子師範学校を設置すべき理由について、京都府の田中視学官が論じたものです。2-7は、武井校長が語った内容を記したもので、校旗や校歌、校訓について語っています。2-8は、開学からしばらく経った1910年に完成した校舎やその新築記念式典の様子を記しています。(中村)

2-6 京都府教育会「本府師範学校の女子部を拡張すべし」

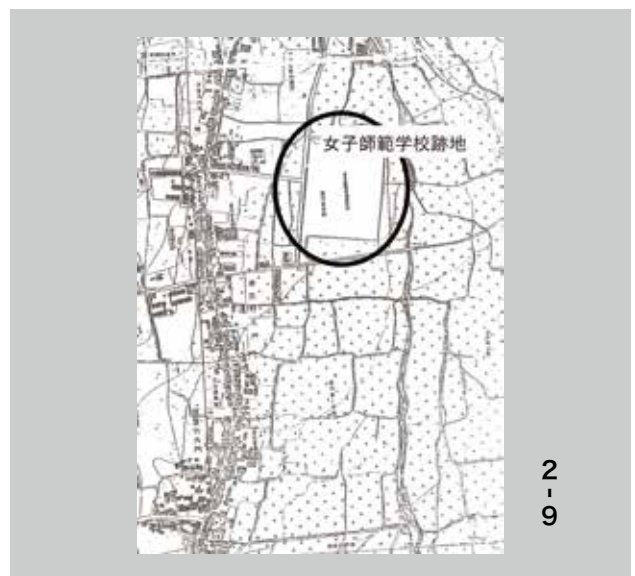
1900年(明治33)5月発行の『京都府教育雑誌』97号に掲載されたこの論説は、京都府下において教員不足が予想されるなかで、師範学校の定員増加が必要であるとし、さらに「女教員の成績見るべきもの多き」ことを理由に、京都府師範学校における女子部の拡張(少なくとも定員の3倍増)を主張しています。こうした意見も、女子師範学校開校を後押しするものでした。なお、掲出した写真は一部を加工しています(冒頭の論説1本を略し、かつ連続するページを結合)。(中村)

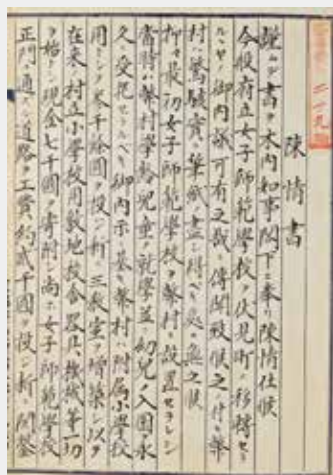
(2) 地域社会と女子師範学校

京都府女子師範学校の校舎は、はじめ愛宕郡大宮村(現、京都市北区)にありました(2-9)。完成は1910年(明治43)で、校舎周辺の道路整備を含め、多大な費用を要したのです

が、その全てが大宮村からの寄附でまかなわれたようです(2-10)。大宮村にはもともと小学校があったのですが、その児童を全て女子師範学校附属小学校で受け入れる約束がなされたことをはじめ、女子師範学校を誘致することによる様々な利益が勘案された結果でした。

しかし、それから10年もしない1916年(大正5)、木内重四郎京都府知事が主導した施策が大きな波紋をもたらします。木内は女子師範学校を、大宮村から伏見町(現、附属桃山中学校)に移転させることを主張し、早くも伏見町からの寄附を取り付けていました(2-12)。当時、木内は京都府を学問の中心地とすべく、様々な文教政策を進めていて、その一環として府立高等女学校と女子師範学校を同一敷地内に併設することを考案したのです(2-11)。これに対しては、当然大宮村から猛反発があったのですが(2-10)、木内は移転を女子師範の衰退を止める良策として譲らず、大宮村の反発を押し切ったようで





2-10



2-11



2-12

す。こうして 1918 年4月、現在の附属桃山学校園のある地区へと、女子師範学校は移転します。

女子師範学校と府立高等女学校とが併設されたことで、両校では様々に交流がなされました。両校で共同で行われる行事も多く、校長を含む多くの教師が両校を兼任していました(2-13)。高等女学校の生徒のインタビューには、入学時年齢の問題で師範学校学生の方が2歳ほど年上であったから、女学校生徒としては「師範にリードされている気」で「何か楽しかった」とあります。また、女子師範の生徒はよく勉強するとされ、女学校の生徒に刺戟を与えていたこと、音楽の授業が唱歌・器楽ともに充実していたこともわかります(2-14)。

1921年5月、女子師範学校を不幸が襲います。生徒たちの間で急性感染症である腸チフスが流行し、寄宿舎は病棟となり、最終的には11名もの死者を出す事態となりました(2-17)。府庁文書(大10-0029)のなかには、5月29日～9月30日の治療状況や学校の措置に関する記録が残されています(2-18)。あわせて6、7月には、京都府下の学校関係者はじめ各方面から、生徒たちへの見舞があったこともわかります(2-19)。いたましい出来事ながら、女子師範学校が多くの人々に支えられていたことを、これらの記録は教えてくれます。

2-9 大宮村時代の校舎の跡地を記した地図

1925年(大正14)に作成されたこの地図には、1918年に移転した京都府女子師範学校の跡地が記されています。女子師範学校が大宮村の広い田園の中に設置されたことがわかります。また他よりも幅の広い女子師範学校前の南北道路は、大宮村の協力で女子師範学校設置にあたり整備されたものです。(中村)

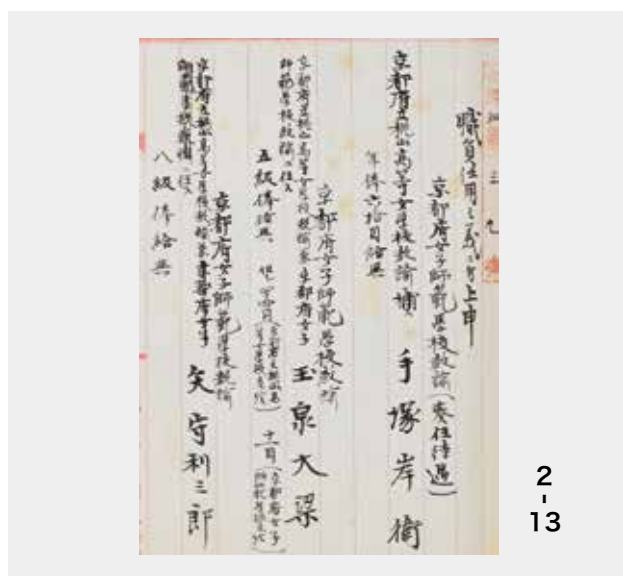
【京都府女子師範学校の伏見町移転に関する資料】

2-10 師範学校、女子師範学校移転反対陳情書

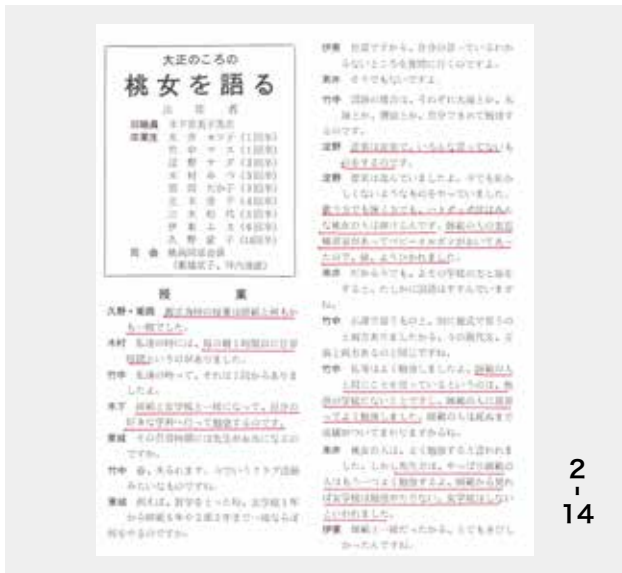
2-11 京都府女子師範学校移転に関する京都府知事の見解

2-12 伏見町長「寄附願」(京都府知事宛)

本件の概要は本文を参照。2-10は、移転反対を大宮村が京都府知事に陳情したものです(冒頭部分を掲出)。このなかには、女子師範学校の開校当初、大宮村が同校を受け入れた顛末も記されています。2-11は、木内重四郎京都府知事的主張を記した文書で、女子師範学校やその後の教員養成にとって、伏見町への移転および高等女学校との併設が大きなプラスになることを強調する内容です(後半の一部を掲出)。2-12は、女子師範学校の移転と高等女学校の設置にあたり、伏見町長がその経費として金6万円を京都府に寄附することを願い出たものです。(中村)



2-13



2-13 職員任用之儀二付上申

1918年(大正7)3月に出されたこの文書からは、京都府女子師範学校の教諭が、京都府立桃山高等女学校の教諭を兼任していたことが知られます。両校の校長も兼任でしたし、同様の例は、この他にも多くあったようです。(中村)

2-14 『桃高二十年誌 車石』

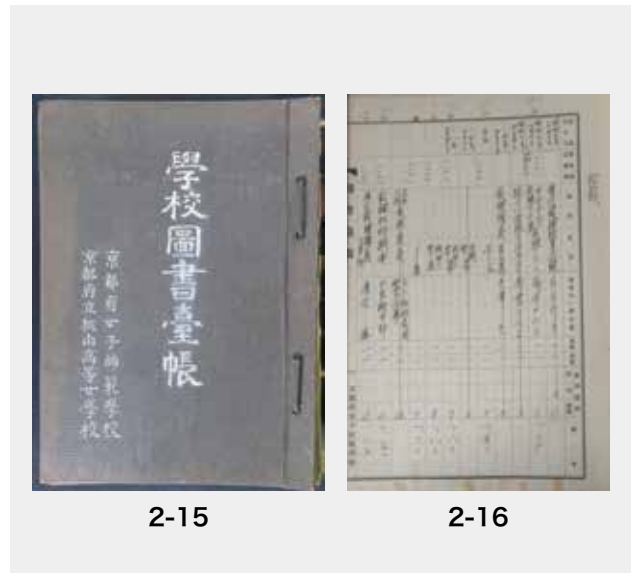
京都府立桃山高等学校は、京都府立桃山中学校(1921年開校)と、京都府立桃山高等女学校をルーツに持ちます。1969年(昭和44)3月に同校の創立20年を記念して刊行された本書には、「大正のころの桃女を語る」として桃山高等女学校の卒業生の対談を載せており、併設校だった女子師範学校生徒との交流も語られています。掲出にあたり一部を加工しています(冒頭部分を中略し、連続する箇所を結合)。(中村)

【女子師範学校と桃山高等女学校の図書帳】

2-15 学校図書帳

2-16 学校図書分管簿(裁縫科)

京都教育大学教育資料館には、両校併設時代の図書帳が残されています。このうち分管簿は、裁縫科の他にも、歴史科・公



2-15

2-16

民科・博物科・国漢(国語・漢文)・被服・叢書・辞書・宗教があり、当時の蔵書を知ることができます。(中村)

2-17 西山續(女子師範校長)『追懐』

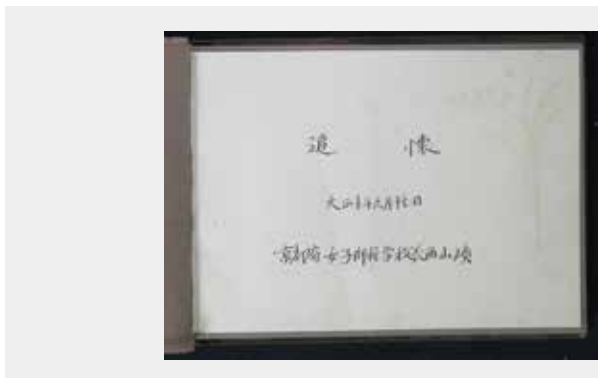
この冊子は、1921年にチフスで亡くなった11名の生徒たちを校長の西山續が悼んで作成したと考えられます。各頁ごとに生徒の写真とその歩み(学歴)、死没月日を記しています。(中村)

【チフス流行に関する記録】

2-18 女子師範学校伝染病状況報告の件

2-19 師範学校、女子師範学校伝染病発生に付金品寄贈者に挨拶の件

2-18は、京都府女子師範学校で作成された1921年(大正10)5月29日～9月30日の治療状況や学校の措置に関する記録です。上段から月日・患者数・治療状況・学校の処置・看護人人数(看護婦・助手・付添・男・女・夜勤)・来訪者・備考が記されています。また、6・7月の見舞記録もあり、金銭・物品などを記したリストと、見舞者のリストからなりますが、このうち後者を掲出しました(2-19)。京都府下の学校関係者はじめ各方面から様々な生徒たちへの見舞がなされたことがわかります。(中村)



2-17

第3章 皇太子の訪問と女子師範の教育

京都府女子師範学校では、どのような教育がなされていたのでしょうか。桃山女学校の生徒による回想は貴重な示唆を与えてくれますが、その全体像を知るには、「京都府女子師範学校学則」(1908年)に記載されている「**学科課程表**」(3-1)が有益です。本科第一部(4年課程)では、第1学年は一般教養的な内容を専ら学び、第2学年から教育学的教育(「心理」など)、第3学年から各教科の「教授法」がそれぞれ始まり、第4学年で教育実習・保育実習が課されています。では、これを男子を対象とする京都府師範学校(当時)の規程(府庁文書「明41-0041」)と比較すると、女子師範のみにみえるのは「裁縫」(15時間)と「家事」(4時間)で、男子のみなのは「法制及経済」(2時間)と「農業」「商業」(6時間。いずれかを選択)です。ここからは、当時に女子向けとされた教科の比重が高いことが分かります(時間数は、各学年での毎週の教授時数を合計したものです)。また、男子のみの科目は少ないようですが、「数学」「博物」「物理及科学」では男子の方が時間数も多く、高度な内容が扱われたようです。顕著に異なるのは「体操」で、男子は17時間、女子は11時間でした(京都教育大学2001)。

もう一つ、これまであまり注目されてきませんでしたが、1910年(明治43)に明宮嘉仁親王(後の大正天皇)が完成したばかりの女子師範学校(当時は大宮村)を訪問した際の記録からも、当時の学校の姿を垣間見ることができます。日常的な様子ではもちろんありませんが、手がかりとなる資料が少ない現状、授業の指導案まで知ることができるなど、貴重なものです。

大正天皇というと、幼少期より病弱との印象が強いかもかもしれません。しかし、そのイメージからは少々意外ですが、近年の研究では、皇位を継承する以前、沖縄・台湾を除く、大日本帝国各地を訪問し、さらに1907年には日本が保護国化していた大韓帝国にまで訪れていたことが注目されています(後には朝鮮語にも一定程度習熟していたとか)。各地の小学校や師範学校を訪れることも多く、その先々では、案内役に対してアドリブを交えて質問したり、そこに暮らしている一般の人々にも(ときには正体を隠して)話しかけるなどしていたことが知られています(原2015)。京都府女子師範学校を訪れたときも、例によって当初予定していたスケジュールとは異なる時間帯での見学となったようです(3-7)。

皇太子時代の皇太子が同校を訪れたのは、1910年9月29日のこと。午前11時35分から午後1時30分まで女子師範学校に滞在し(当初の予定では、午前11時10分～午後0時50分)、地理・歴史、音楽、遊戯の授業などを見学しています。このとき皇太子が見学した授業の内容を含む記録が、「府庁文書」のなかに「**皇太子殿下行啓二関スル書類**」と題する簿冊(明

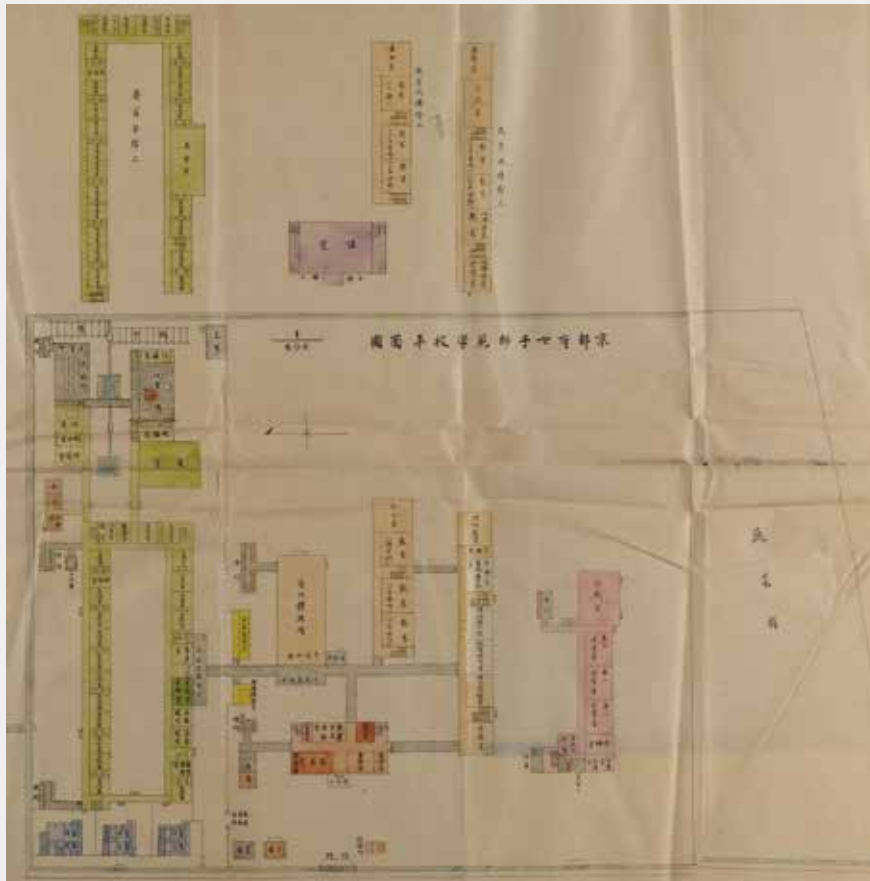
43-0020)として残されています(3-4)。これによれば、用意された授業は4つで、その第一は、本科第二部第2学年対象の「国民教育ヨリ見タル地理・歴史教授」です(3-8)。担当は、内田勇作教諭。日本の風土や歴史が培ってきた「日本精神」が主題です。第二は、本科第一部第2学年対象の歴史科で、テーマは「明治初年ノ学制ト京都市ニ於ケル小学校ノ設置」とされ、増澤長吉教諭により、学制制定の歴史的意義と師範学校の役割が語られています(3-9)。第三は、本科第一部第3学年の唱歌で「皇国ノ頌」の三部合唱がなされました(コラム)。第四は、本科第一部第2学年・講習科第2学年共同の体操(矢守利三郎教諭)で、そのハイライトが全身運動としての遊戯「ファースト」でした(3-12)。

3-1 女子師範学校の学科課程表

1908年(明治41)の「京都府女子師範学校学則」に収められた本資料には、明治末期の定員カリキュラムと各教科の授業時数等の「規定」がまとめられています。4年間の教育課程で修了する本科第一部の定員は320名で、公費生と私費生がいました(ただし「当分公費生八十人私費生百六十八人ヲ限り收容ス」との但し書きがあります)。第二部は2年間の教育課程で公費生40名を受け入れました。第一部も第二部も週あたりの授業時数の合計は34時間でした。月曜日から金曜日6時限、土曜日のみ4時限であったと考えると、師範学校の生徒は在学中朝から夕方までみっちり授業を受けていたことになります。各教科ともに、下の学年では教科の内容に関する授業を受け、学年が上がるにつれてその教科の教授法も学ぶようになっていきます。このカリキュラム構成は、現在の教員養成系教育学部にも引き継がれています。(檜下)



3-1



3-2

3-2 京都府女子師範学校平面図

1910年(明治43)時点の学校平面図です。図の下部が各建築物の1階平面図、上部が2階部分を表します。図の最下部にある校門をくぐると、正面にオレンジ色で示された女子師範学校、左手に緑色で示された生徒用寄宿舎、右手奥にはピンク色で示された附属幼稚園が配置されていました。学校と寄宿舎の間に黄色く塗られたものは楽器練習室です。寄宿舎には炊事場、食堂、浴室、病室が設置され、生徒たちの生活の全てがこの敷地内で完結できたことがわかります。(桧下)

【皇太子の京都訪問スケジュール】

3-3 『大正天皇実録』巻3(202頁)

3-4 府庁文書(明43-0020)「皇太子殿下行啓ニ関スル書類」

3-5 皇太子殿下行啓御日程

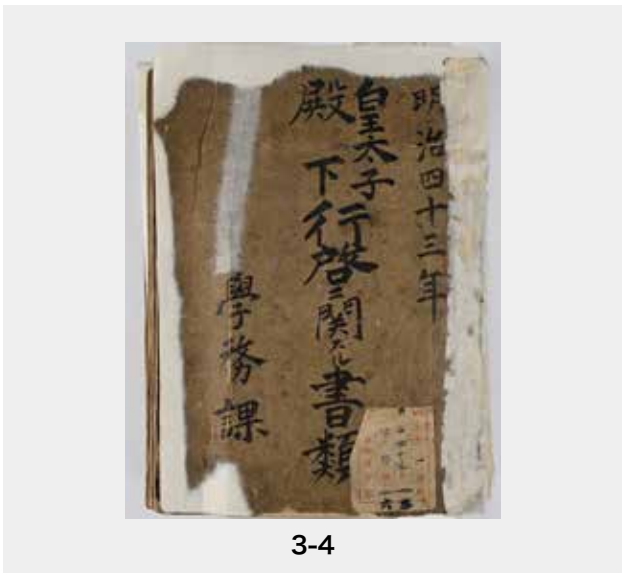
3-3は、大正天皇の誕生から崩御までの生涯を編修した実録です。宮内省図書寮の大正天皇実録部により1927年(昭和2)から1938年にかけて編集事業が展開されました。大正天皇は近代日本の最初の皇太子であったため、養育や教育の実態、皇太子としての地方への行啓の様子が細かく記されています(写真では該当箇所を朱筆で囲んでいます)。

3-5は、「皇太子殿下行啓ニ関スル書類」(3-4:総論参照)

に収められた皇太子行啓のスケジュール表です。1910年(明治43)9月28日から10月3日までの間に、京都の16もの諸学校に加えて図書館、動物園、企業などに訪問したことがわかります。京都府女子師範学校へは9月29日の午前11時10分から午後0時30分まで滞在する予定でした。しかし、「台覧ノ御模様」によれば、同校の「御座所」からの景色を気に入った皇太子は全



3-3



3-4



3-5

体のスケジュールを後ろにずらすように指示し、午後1時30分まで滞在することになったのです。(檜下)

【皇太子の見学ルートと御座所】

3-6 台覧ノ御巡路各室ノ配置及ヒ御座所ノ飾付

参考：御座所写真

3-6 は、訪問時に皇太子が校内をどのようなルートで台覧したのかを示す図です。学校平面図(3-2)と照らし合わせると、皇太子が滞在する「御座所」は校内で最も日当たりがよい南東2階の作法室が充てられたことがわかります。正面入り口から入った皇太子はまずここに通され、隣室の裁縫室の「成績品陳列室」を見たあと、階下の第二裁縫室で行われた第二部第2学年の教育の授業、教育研究室で行われた第一部第2学年の歴史の授業を周り、屋内体操場で行われた第一部第3学年の唱歌と第一部第2学年及び講習科第2学年の遊戯の授業を台覧し、正面入り口から去ったことがわかります。

また、「御座所」の内装や装飾も記録されており、学校の皇太子歓待の工夫を窺い知ることができます。「御座所」に充てた作法室には床の間と違い棚があり、東西2室はそれぞれに24畳の広さでした。西の間の中央に絨毯を敷いて机を据え、金欄の机掛がかけられその上に「御煙草入函」が置かれました。部屋には「懸物」「香爐」「屏風」「置物」「生花」「盆栽」等が飾り付けられました。それぞれの持ち主や誰の手によるものかが記録されています。(檜下)

3-7 「台覧ノ御模様」

この頁には皇太子の台覧の様子が細かく記述されています。「後座所」からは東山一帯が一望でき、当日の天气が良かったため、皇太子はその景色を気に入り予定を延ばして授業台覧の開始時刻を午後1時からにするよう命じ、お付きの者に「東山ノ諸峯」について尋ねたということです。師範生徒、附属小学校児童らの成績品の陳列室や、歴史、教育の各授業では熱心に見学し、時折、同行した府知事や学校長らに質問をしました。唱歌の授業では楽譜と歌詞を見ながら生徒らの演奏に合わせて足拍子を取り、特に最後の「楽器合図」とともに活発に遊戯する生徒の様子には最も興味をもったようであったと記録されています。一連の台覧を「御気色麗シク」終えて、皇太子の車が発したのは午後1時30分でした。(檜下)



3-6



参考



3-7

3-8 本科第一部第2学年「国民教育ヨリ見タル地理・歴史教授」

第二部第2学年の「教育科」の授業の草稿です。授業者は内田勇作教諭、授業内容は「国民教育ヨリ見タル地理・歴史教授」でした。授業の最初に「地理科及日本歴史科教授の要点」について生徒と問答し、そののちに教師の講義に入る授業スタイルがとられています。講義では初めに「我国体ノ尊厳ニシテ世界無比ナルコト」「我国土ノ優美ニシテ世界ニ卓絶セルコト」が説明され、「国民精神」とは「二千数百年間此国土此国体ト間ニ生シタル一種ノ信仰ナリ」と説示されました。天皇制国家イデオロギーを強化すべく「国体」概念に依拠する戦前の地理・歴史教育のありようが、皇太子の台覧という場においては、より強調されることになったのでしょうか。(榎下)

3-9 本科第一部第2学年歴史科

第一部第2学年の「歴史科」の授業の草稿です。授業者は増沢長吉教諭、授業内容は「明治歴史の中 学制ノ頒布」でした。この講義では「維新前」における藩校や寺子屋について紹介したのち、1871年(明治4)の廃藩置県、翌1872年の「学制」発布について解説、さらに京都府がこれに先立って「明治元年小学校ノ設置ヲ論達」し「既ニ明治二年五月ニ於テ京都上京ニ小学校ノ創設ヲミタリ」と府の教育施策の特徴が解説されました。「歴史科」の授業ではあるものの、教育史に焦点を当てた内容を展開することで、師範学校の特色を打ち出し、さらに京都府教育界の先進性を皇太子にアピールすることを狙ったと考えられます。(榎下)

3-13 本科第一部第2学年、講習科第2学年体操・遊戯

参考：昭和に発行された楽譜集に掲載された遊戯「ファウスト」伴奏用楽譜

第一部第2学年と講習科第2学年の「体操・遊戯」の授業の草稿です。授業者は矢守利三郎教諭でした。興味深いのは導入部の準備運動の様子です。「準備運動トシテ下翼直立シテ足ノ前後出ヲナサシメ」とあります。「下翼直立」とは、両手を腰につけて直立した姿勢です(次ページ図左：出典は坪井玄道、可児徳『小学校体操教科書』)。続いて首と胸の運動として、「十字形開脚直立」すなわち両腕を地面と平行になるよう左右に伸ばし足を左右に開いて立つ姿勢のまま「頭ノ後屈」をさせます(次ページ図右：「十字形直立」の姿勢。足を左右に開くと「十字形開脚直立」となる。出典は同上)。こうした準備運動の後、遊戯「ファースト」が披露されました。この遊戯は、グノー作曲の歌劇《ファウスト》の一曲「ファウストのワルツ」の旋律にのせて振付けられたダンスです。ボストンの体操学校の教師によって創作されたものを、1903年(明治36)に米国留学から帰国した文部省留学生の井口阿くり(1871-1931)が「Gymnastic Dance」の一つとして日本に紹介したとされます。(榎下)



3-8



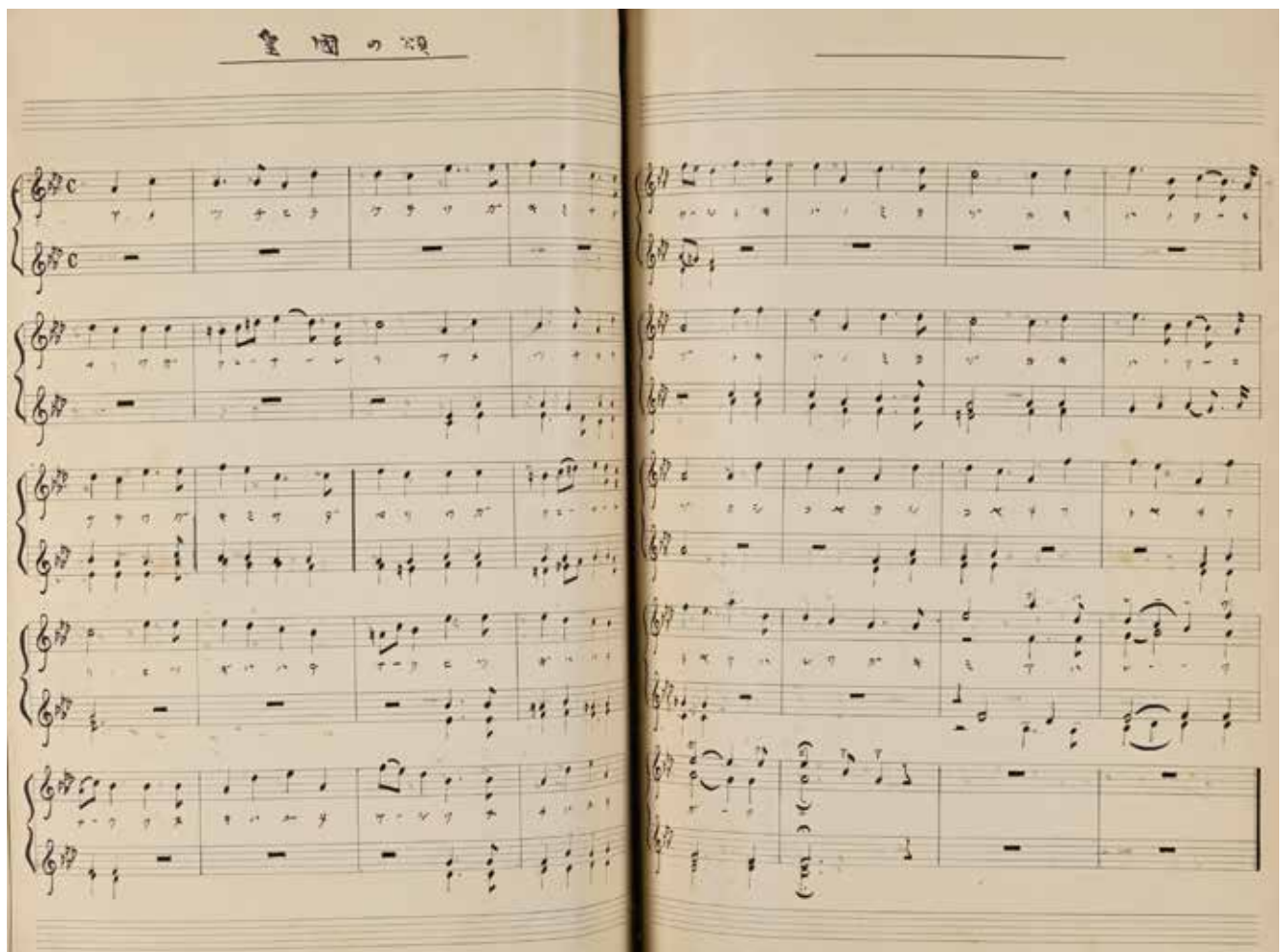
3-9



3-13



参考



3-12 楽譜：皇國之頌

【コラム】 皇太子が聴いた唱歌《皇国の頌》

皇太子の台覧において本科第一部第三学年が唱歌の授業で歌ったのは《皇国の頌》でした(3-10・3-11・3-12)。同曲はF.メンデルスゾーン作曲《ラウダ・シオン》(シオンをたたえよ、op.73、1846年作曲)で使われている旋律に、国文学者の東宮鉄真呂(1863-1917)が作歌した歌詞をつけたものです。作曲家で日本教育音楽協会初代会長の小山作之助(1864-1927)が1904年(明治37)に出版した『重音唱歌集』の最後に収められていた同声3部合唱曲で、今回展示する手書きの楽譜はこの楽譜集からピアノ伴奏を除いて写譜したものと推察されます。『重音唱歌集』に掲載された歌詞は下記のものでした(小山1904)。

天地開けて、我が君定まり、わが国成れり、
日嗣は はてなく、
国内は ゆたけし、
常盤の御代ぞ、堅磐の国ぞ、
かしこや、
たふとや、
あはれ 我が君、あはれ 我が国、あゝ

ところでメンデルスゾーンが作曲した原曲の《ラウダ・シオン》は、キリスト教のグレゴリオ聖歌の一曲「ラウダ・シオン」を題材にしています。その24節に及ぶラテン語の詞に対して、メンデルスゾーンは4部合唱(一部独唱を含む)とオーケストラという大編成、かつ八曲から構成される大曲を作曲しました。《皇国の頌》で使われる旋律は三つ目の曲に現れます。美しく優美でありつつも力強さが感じられるメンデルスゾーンらしい旋律です。この旋律の部分は、原曲では下記のラテン語の1節が繰り返して歌われ、ソプラノ独唱が高らかに歌い上げてコーラスとオーケストラが同じ旋律を返すという構造になっています(Rietz 1874)。

Sit laus plena, sit sonora,
Sit jucunda, sit decora,
Mentis jubilatio.
(賛美を 声高らかに 楽しく 美しく 心の喜び)

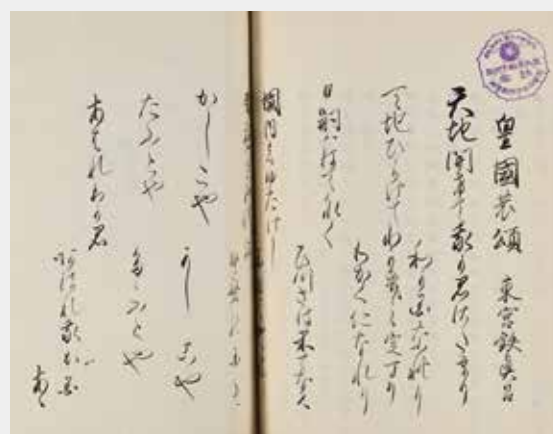
原曲では、「Mentis jubilatio」(心の喜び)が歌われる旋律部分に臨時記号(♯)が付き、まさに喜びにあふれる感情を呼び起こすような印象的な旋律線となります。《皇国の頌》に目を向けると、この印象的な旋律線の部分には皇室礼賛の歌詞内容で最も重要な言葉である「わが国成れり」が置かれ(楽譜の

2段目の2小節目)、この言葉が自然に印象深く歌われるという音楽的効果をもたらしています。混声4部合唱の原曲は、《皇国の頌》では一番低いバスパートを除く形で同声3部合唱に改められていますが、変イ長調という調性も各声部の動きも原曲のものがそのまま生かされています。この合唱は当時の唱歌教育の水準に照らせばかなり難易度が高かったと考えられます。

台覧当日は音楽教師が病欠のため指揮も伴奏もなしで歌われたと記録されていますが、学校内で最も広い、つまりおそらくは最も響きの良い屋内体操場で披露されました。メンデルスゾーンの旋律とハーモニーによって歌われたこの皇室礼賛唱歌の3部合唱は、皇太子の耳にも心地よく響いたことでしょう。(檜下)



3-10 授業：本科第一部第三学年唱歌



3-11 歌詞：皇国之頌

第4章 女子師範学校の郷土教育

(1) 郷土教育とは

京都府女子師範学校の教育・研究活動として注目されるのは、1930年代に進められた郷土教育です。教科書の国定化に代表される1900年代からの学校教育に対して、1920年代には、それを画一的とする批判が高まり、地域の実情に即し、生活に役立つ教育を求める声も強まっていました。そこで様々な教育実践が試みられたのですが、郷土教育もその一つで、1930年代に各地の師範学校や小学校を中心に取組みられました(4-1～4-3)。

郷土教育には、大きく二つの方向性がありました。一つは、郷土を対象として社会的な見方や科学的方法を育成しようとするものです。郷土教育で培った力を基礎に、より発展的な学習に導くとの発想から、とくに小学校向けの教育として注目されました。もう一つは、郷土を理解する学習を通じ、郷土の問題点や課題を明らかにし、その解決をはかることを目指す教育です。この場合、愛郷心を持ち、よりよい郷土を作る主体となることが目指されます。1930年代に盛んになった郷土教育は、前者を背景として持ちつつも、戦時下で農村の「復興」や生活の「更生」が説かれるなか、後者が次第にクローズアップされ、愛国教育と結びついていったことが指摘されています(伊藤純 2008、板橋 2018 など)。

郷土教育は、1930年度(昭和5)、翌31年度に「郷土研究施設費」が全国の各師範学校に交付され、さらに1931年の「師範学校規程」の改正で、地理科に「地方研究」が導入されたことを契機に、大いに隆盛します。この結果、師範学校を中心に、各地の学校で「郷土研究室」などを設置する動きがみられました(伊藤純 2008)。



【郷土教育連盟が発行した雑誌】

4-1 『郷土』創刊号

4-2 『郷土科学』第7号

4-3 『郷土教育』第18号

『郷土』『郷土科学』『郷土教育』は、民間教育団体の郷土教育連盟が発行し、日本各地の郷土教育の実践や理論の探究、情報交換、郷土教育の普及に大きな役割を果たした機関誌です。機関誌『郷土』(創刊号1930年11月～第6号1931年4月)は、『郷土科学』(第7号1931年5月～第17号1932年3月)、『郷土教育』(第18号1932年4月～第43号1934年5月)と改題を繰り返しながら、全国の郷土教育運動の重要なハブとして機能しました。創刊号には「地方精神に聖火を点ぜよ、青年運動に魂の糧を与えよ。そして新興郷土科学を基礎として澆濁たる日本民族の世界的自覚を喚起せん事を祈る」との「宣言」が掲げられています。

発行者の郷土教育連盟は、1930年(昭和5)、刀江書院社主尾高豊作(1894-1944)と文部省囑託の人文地理学者小田内通敏(1875-1954)が中心となって結成された民間教育団体です。教育評論家の志垣寛、日本にドルトン・プランを紹介した教育者の赤井米吉、池袋児童の村小学校で生活綴方を実践した峰地光重ら、また地理研究者の長井政太郎、三沢勝衛が集い、当時の郷土教育の潮流をリードする存在でした。郷土教育の名の下に、「科学的」な郷土調査にもとづく「郷土認識建設運動」(小田内)、新教育の思想を摂取・統合したカリキュラムや教育方法の改造(尾高)など、独自の教育思想を掲げました。(神代)

(2) 京都府女子師範学校の郷土教育の理念と特徴

京都府で郷土教育運動の中心を担ったのが、京都府女子師範学校でした。そこでまずは、京都府女子師範学校でなされた郷土教育の試みの理念や特徴を5つに分けて、同校が1933年(昭和8)に刊行した『郷土教育の概要』(4-4)と1934～1940年にかけての『郷土研究』(2～8号)(4-5)から紹介します。

第一は、郷土教育の目的です。『郷土教育の概要』(以下、『概要』と略します)には、「郷土の教育的意義は自ら明瞭で郷土愛を涵養することを中心とし、之がためには先づ郷土の正しき認識による理解を得しめ、究極に於て理想的郷土の建設に貢献し得る基礎を培養する事に在る」とあります。先に郷土教育の二つの目的意識について紹介しましたが、このうち第二の性格が色濃く出ていることがわかります。

第二は、郷土の範囲です。同じく『概要』によれば、「我々の経験上最も明瞭な体験となつて生きている郷土は何と言っても行政的区画による郷土であらう」とあり、行政区画すなわち京都

府が対象とされました。京都府女子師範には、京都府のみならず、沖縄を含む全国各地から入学者があったのですが、生徒自身の生活実感よりも行政区画を重視するのは、教育的な理由よりも主に各府県を単位に師範学校が設置されたことが影響しているのかもしれませんが、ただし、京都府女子師範の郷土教育では、京都府下に限るとはいえ、その対象は、地理・地学・民俗・歴史・文学など様々で、それは『郷土研究』各号に掲載されている生徒の研究成果や研究活動一覧からも一目瞭然です。

第三は、愛郷心の育成を愛国心の涵養と強く結びつけていることです。1930年代とくにその後半における各地の郷土教育によくみられる傾向で、このことが戦後、さらには現在に至るまで郷土教育の評価を難しくしてきました。本展ではその研究史には踏み込みませんが、京都府女子師範学校の上田剛校長は、当初より「愛国の至情は郷土を離れて養はれない」（『概要』）として、愛郷心を通じてより高次の愛国心に至ることを理想としていたようです。ただし、『郷土研究』に寄せられた生徒の研究成果は必ずしも愛国心一辺倒のものとはいえません。もちろん時局の影響を感じさせるものも少なくないのですが、今後は当時の女性教員・女子生徒に求められた期待や彼女たちの自己意識を念頭に置きつつ、その一つ一つを読み解いていく作業が求められるように思われます。

第四は、詳しくは次項で扱いますが、教師と生徒の共同作業を重視していることです。『概要』には、「教師のみの調査になる郷土研究は生徒の興味を刺戟することは極めて乏しい。…（中略）…本校の郷土調査は寧ろ教師の指導による生徒の活動を主眼とし、之が整理に当たっても常に教師と生徒とが共同作業として行ふ」とあります。生徒の自主的研究活動に対し、教師がどのように関わるかは、現在でも議論が尽きない点ですが、京都府女子師範学校では以上の発想に立ち、その具体的な共同作業の場として「郷土研究室」が設置・運営されました。

第五は、京都府下各地の学校との連携・交流です。とくに京都府女子師範学校は、他の府県の師範学校と同様、府下での指導的な立場を自認し、また期待されていました。「府下の郷土教育の総合的立場から之が中心となって実際上の効果を期するところがなくてはならぬ」とか、「郷土教育に従事し、ある各小学校との連絡を保ち、相携へて方向を誤らぬやう進み、又一地方が他地方との比較推究の必要ある場合は何時でも其の資料の提供をなし得ることも必要であり、自他共に相助けて府下の郷土教育を発展せしめんとするものである」（いずれも「郷土調査の方針」『概要』より抜粋）と記されるとおりです。

実際、1932年には、京都府女子師範学校の講堂（附属小学校の講堂とする記事もある）で「郷土教育」をテーマに訓導協議会が開催され、京都府内各地での実践が報告されました（4-6・4-7・4-8）。また、本学附属図書館書庫には、師範学校・女子師範学校時代の蔵書が配架されているのですが、そ

の東館3階には、京都府内の小学校等が編纂した各地の郷土誌（4-9～4-12）や、京都府外の師範学校等の刊行物が多数あります。京都府女子師範学校と府内外の師範学校、小学校など各種団体との連携は、まだ探究の余地がありそうです。

【京都府女子師範学校の刊行物】

4-4 『郷土教育の概要』

4-5 『郷土研究』第7・8号

文部省の施策としての郷土教育は、1930・31年度（昭和5・6）に「郷土研究施設費」が師範学校に公布され、師範学校規定地理科に「地方研究」が導入されたこと（1931年1月）に始まります。京都府女子師範学校もこの政策方針にしたがって、郷土教育研究を精力的に行っていました。その推移を知ることができる資料が『郷土教育の概要』（1933年）であり、またその続編として制作された報告集『郷土研究』（第2号～8号、1935～1941年）です。

『郷土教育の概要』には、その名の通り、京都府女子師範学校における郷土教育研究の概要が示されています。同書「本校郷土教育目的」には、「郷土人として陶冶すること」「郷土教育者として陶冶すること」の「二大理想」が掲げられました。師範生徒たちは、自分自身が郷土を研究しよき「郷土人」となることによって、優れた「郷土教育者」になることが求められていたようです。彼女たちの研究の一部は『郷土研究』に掲載された研究報告にその内容をうかがうことができます。（神代）



4-4



4
5

【郷土教育に関する訓導協議会】

4-6 「郷土教育二関スル府下訓導協議会並二展覽二関スル件」『京都府公報』603号、1932年(昭和7)11月22日(部分)

4-7 「郷土教育で訓導協議会 女師附属の発表会」『京都教育』534号、1932年(昭和7)7月

4-8 「郷土教育訓導協議会 女師附属小学で」『京都教育』543号、1932年(昭和7)11月

「京都府広報」や雑誌『京都教育』(民間団体京都府教育会発行)を繙くと、京都府女子師範学校(附属小学校)で開催された、郷土教育に関する訓導協議会の記事を見つけることができます。「訓導」は旧制の小学校における正規教員(現在の「教諭」)を意味しており、訓導協議会はそんな小学校の先生たちが集まって行われた教育実践の研究発表会のことです。1932年(昭和7)11月25日に、京都府女子師範学校講堂で開催された協議会では、新しくはじまった郷土教育を推進するための様々な協議会の提案、意見発表が行われ、また「郷土展覧会」への出品がありました。

展覧会出品のみの例も合わせれば、京都府市のすべての行政区(京都市および17郡)の小学校が関わっていた、大規模な催しだったことが窺われます。9件の協議会は、「各都市より提出されしものにつき当校〔京都府女子師範学校〕にて選定し」(『京都教育』534号)とあり、京都府内の郷土教育の研究をリードする京都府女子師範学校の姿を垣間見ることができます。そうして選定された協議会は、「教育実施施設上考慮すべき事項」「適切なる範囲」「資料取扱」「郷土資料の蒐集並に之が利用」「郷土調査」「郷土調査物及郷土室の活用方法」など教育の方法論的な課題があり、他方でとくに農村部のそれは



4-7



4-8

「自力更生」「農山村に於ける」「女教員を農村教育者として」など、昭和恐慌による農村疲弊の打開策としての郷土教育、という性格を色濃く示すものとなっています。(神代)

【京都府下の郷土教育実践報告集(京都府女子師範学校郷土研究室所蔵図書)】

- 4-9 明倫尋常高等小学校『我が郷土』
- 4-10 網野尋常高等小学校『郷土読本』
- 4-11 中舞鶴尋常高等小学校『郷土調査』
- 4-12 熊野郡久美尋常高等小学校『久美郷土読本』巻1

再び『郷土教育の概要』によれば、京都府女子師範学校の郷土教育は、京都府下各地の学校等と連絡をもちながら進められていたようです。学校としては京都府全体の郷土を研究の対象におさめたいものの、生徒の出身地は府下の半数に過ぎず、また半数は寄宿舎生活をおこなっているため、それがかなわないということが理由でした。また同時に、郷土教育に取り組む各地の小学校とのネットワークのなかで中心的な位置を占め、その影響力を行使しながら郷土教育を発展させたいということもあったようです。



4-6



4-9



4-10



4-11



4-12

そうしたことを反映して、郷土研究室には京都府各地の小学校から郷土教育の取り組みに関する資料があつまってきました。現在京都教育大学附属図書館で所有している資料としては、例えば上記4冊があげられます。いずれも郷土研究室の蔵書印がおさされており、師範生徒たちの研究資料となっていたと思われます。(神代)

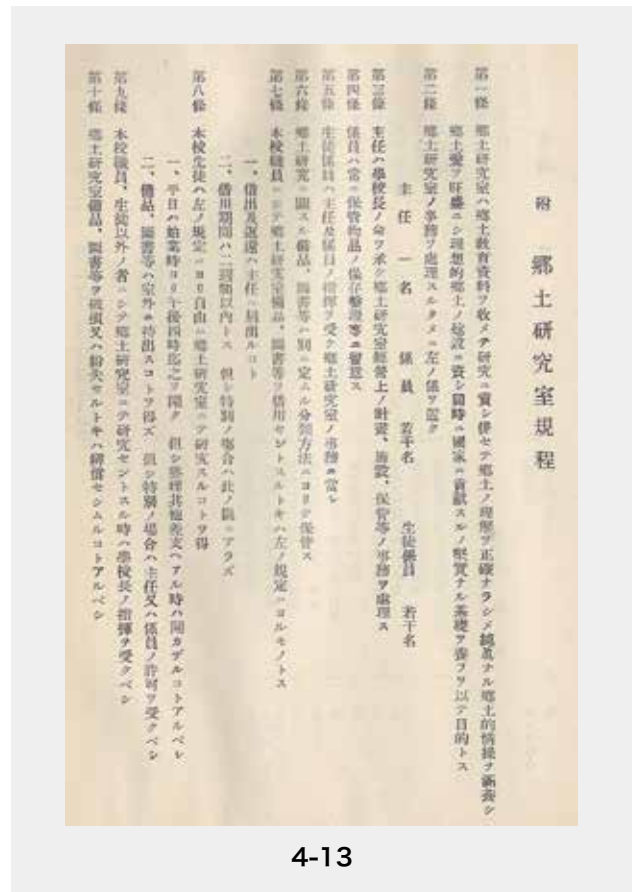
(3) 京都府女子師範学校「郷土研究室」の成果と収集品

京都府女子師範学校が設置・運営した「郷土研究室」に迫ってみましょう。残念ながら、当時の様子を撮影した写真や、研究室の図面等はありません。ですが、和歌山県師範学校・同女子師範学校の「郷土研究室」の写真(鳥津 1998)や、香川県・山梨県師範学校の「郷土研究室」の図面(外池 2004)は参考になりますし、『概要』に記載された「郷土研究室規程」(4-13)や「郷土教育資料目録」からも多少は知ることができます。

規程によれば、郷土研究室には、教諭から主任(1名)と係員(若干名)がおり、その指揮をうけ、事務にあたる生徒係員(若干名)がスタッフとして在籍していました(第2条)。また、他の学校と同様、地域住民に解放されているものではないと考えられますが、生徒は「自由ニ郷土研究室ニテ研究スルコトヲ得」とされ(第8条)、資料の貸出も主任の許可があれば可能だったようです(第7条)。

では、どのような資料が収集されていたのでしょうか。『概要』には「郷土教育資料目録」と題して、収蔵品を自然・人文・図書に大きく分類し、目録化した一覧があります。その多くが、先述した「郷土研究施設費」(1930・31年度)を用いて購入したり、他の学校・地域との交流を通じて入手したものと考えられます。散逸して所在不明なものも少なくありませんが、このうち図書については、先にも述べたように本学附属図書館に配架し、その他は、本学教育資料館で保管しています。たとえば、京都府下の神社仏閣、古民家などを撮影し、キャプションを施した「郷

土写真」(4-14～4-20)は、当時の様態を記録した文化財としてのみならず、「郷土研究室」を通じた生徒の研究成果としても貴重です。また、生徒が採取したと思われる絵はがきが全部で35点あり、金閣や南山城地域の寺社や風景を題材にしたものが目立ちます。なお、この他にも「郷土教育資料目録」によれば、昆虫標本、植物標本、古地図、拓本などが郷土資料として、生徒によって採取もしくは作成されていたようなのですが、教育資料館に所蔵されている標本類等がこれと同じかどうか、まだはつきりとはわかっていません。



4-13



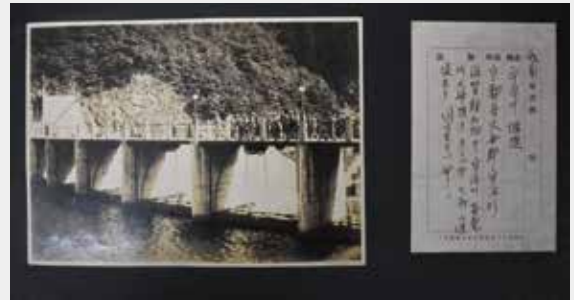
4-14 郷土写真:京都市地方 上京区



4-17 郷土写真:京都市地方 右京区(嵐山渡月橋)



4-15 郷土写真:京都市地方 中京区・下京区(六角堂)



4-18 郷土写真:城南地方(宇治川堰堤)

4-13 郷土研究室規程(『郷土教育の概要』所収)

京都府女子師範学校の郷土教育は、特別に設けられた「郷土研究室」を中心に営まれていました。ここが単なる「郷土資料の陳列室」になってしまわないよう、当時の師範学校教員たちは、生徒が容易に出入りして研究を深められるような運営に心を砕いていたようです。

「郷土研究室規程」をみると、生徒たちの主体的な学習(現代で言うところの探究的な態度)を育成・尊重するための工夫と思われるものが散見されます。例えば第2条と第5条では、「生徒係員」の存在がうかがわれます。師範生徒たち自身がこの

研究室の運営に参画していたということです。また第8条には、平日始業時より午後4時までの間、生徒たちが自由に郷土研究室で研究することが可能とされていました。当時の生徒たちは、日々の授業の合間などに、この研究室を拠点にして自分自身の研究を主体的に深めていたものと思われます。(神代)

【郷土写真】

4-14~4-19 京都府女子師範学校郷土研究室「郷土写真」

4-20 京都府女子師範学校郷土研究室「郷土民家写真」

郷土研究室は、京都市市内の名所旧跡等を写真に収め収集し、資料として活用していました。現在教育資料館には上記7冊が所蔵されています。簡単なキャプションとともに台紙に添付され綴じられた写真からは、現在のわたしたちにもなじみ深い寺社仏閣や景勝地のほか、現在は失われてしまった京都の風景が窺われます。(神代)



4-16 郷土写真:京都市地方 左京区・東山区(清水寺)

第5章 学校・生徒と戦争・戦後

(1) 戦時体制の強まりと生徒たち

1931年(昭和6)9月の満洲事変をきっかけに、日本社会には「非常時」という言葉が溢れかえりました。もともと、このときの熱狂はさほど長続きしなかったようで、日本本土では次第に沈静化していったようです。しかし、研修会等を通じ、教員に対する思想「偏向」のチェックは続いていたし、郷土教育が当初から愛国心の涵養を問題意識として持ち、師範学校の教員を養成していた高等師範学校の教員をふくむ、指導的な教育者が「日本精神」の発揮(ただし、これは排外的なものとは限りません)を声高に叫んでいたことも事実です。さらに、天皇機関説廃絶(美濃部達吉説への弾圧)の影響もあって、1935年に国体明徴声明が発せられると、やがて文部省は教育・学問を天皇の祭祀や政治に直結させる方針を打ち出します(斉藤・佐藤編2016)。

以上をうけ、京都府女子師範学校では、1937年12月、上田剛校長が当時の情勢に関する新聞記事などをまとめた『**時事の葉**』(5-1)を作成しています。その作成意図は、「生徒の認識を深めんがために、官広報、新聞、雑誌等の中から、緊要有益な資料を網羅せんことを企図した」、「生徒諸君は、本校教育の方針に従ひ、十分、本書を熟読して、我等の期待に副はんことを切望する」との言葉に表されています。生徒自身も実際にこの冊子を手にし、学んでいたことは、在學生だった土井芳子氏の「**在支の勇士様**」と題する文章(5-2)からも明らかです。それと同時に、この文章からは、学校の廊下には新聞の掲示板がつけられ、生徒自身が毎朝、朝夕刊を掲示したこと、従軍者の講演会が開催されたこと、女子師範学校で年1回開催される学芸会では、「進め我が船」「眠れ英霊」などの合唱や国防地職の研究発表などがなされたことなども知られます。

日中戦争が開始され、戦時体制が本格的に強化されると、それ以前から地域の実態や生活に即した実践的な教育として推奨されてきた「勤労教育」の延長線上に、「実践的精神教育」として「**集団勤労作業**」が実施されます。当初こそ夏季休暇の始期・終期、その他適当な時期の3～5日の従事が標準とされましたが、文部省はこれを次第に恒久化し、1941年2月には、年間30日以内を基準に、従事期間を授業時間に相当すると位置付けました。さらに戦争末期に労働力の不足が決定的となると、「教育」の一環としての「勤労作業」との建前も放棄され、ついに1945年度には授業は原則停止となります。

こうしたなか、京都府女子師範学校の生徒たちはどのような生活を強いられたのでしょうか。『**昭和14年10月：集団勤労作業の概況**』(5-3)には、宿泊訓練による集団勤労作業の例



4-19 郷土写真:丹後・丹波地方(福知山踊)



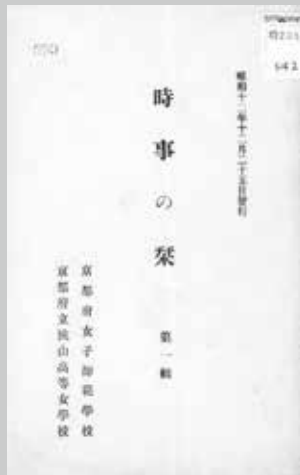
4-20 郷土民家写真



4-21 絵はがき(大原神社:現南丹市美山町)

4-21 絵はがき

郷土教育の一環で、生徒が各自で収集したのと考えられます。現在とは違い、カメラが一般に普及していなかったこともあり、絵はがきは、土産物や記念品として人気を博しました。京都府女子師範学校でこれらがどう活用・展示されたかは不明ですが、和歌山県女子師範学校の「第二郷土研究室」では、絵はがきは台紙に貼られ、陳列棚上部の壁面に並べて掲示されていたようです。(中村)



5-1



5-2

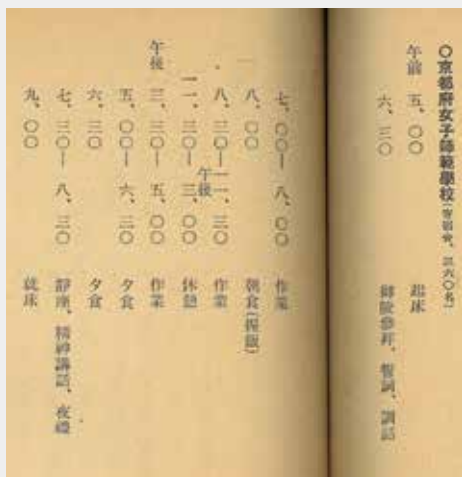
として、京都府女子師範学校の事例が紹介されています（逸見1991）。まだ動員が本格化する以前のことで、これによれば、寄宿舍にて生徒360名は、朝5時に起床し、6時半には御陵を参拝するなどし、午前7時より朝食・休憩を挟みつつ、一日5時間半、「作業」に従事したようです。「作業」の内容は、「裁縫・炊事・洗濯・保育・刺繍・機織」とされています。また、戦争末期のこととしては、桃山高等女学校の生徒とともに女子師範学校の生徒が日本国際航空工業の工場（現、京都府宇治市）に動員されたことが知られています（5-4）。この他にも、当時の卒業アルバムには「防空訓練」の写真が掲載されており（5-12）、教育と戦争への協力・対応との境界が曖昧化していった様子がうかがえます。

5-1 『時事の菜』第1輯

京都府女子師範学校・府立桃山高等女学校の校長（兼任）の上田剛が作成し、両校で使用された冊子で、時局に関する政府からの通知や新聞記事などを収録しています（作成の意図・背景は本文を参照）。第1・2輯（それぞれ1937・1938年発行）とも、国立国会図書館デジタルコレクションで全文閲覧できます。（中村）

5-2 土井芳子「在支の勇士様」

『京都教育』は月2回刊行された新聞で、その697号（1939年1月15日発行）には「銃後の学生から戦線の勇士様へ」と銘打った記事があり、京都女子師範学校生徒の土井芳子氏が「我が校の近況」を報告し、「国体の本義を体得し」、「銃後を護る帝国の女性として近く第二の国民を養成する師範学校生徒として



5-3



5-4

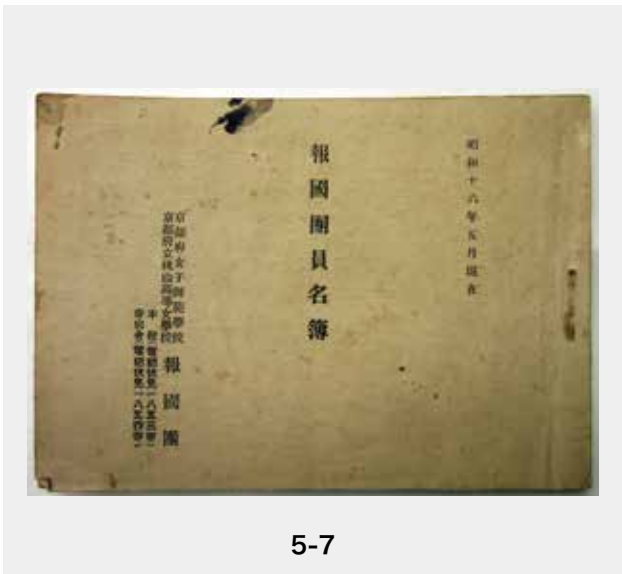


の修養に精進」する決意が語られています。当時の学校生活の一端を伝える貴重な資料でもあります。(中村)

5-3 文部省『昭和 14 年 10 月 集団勤労作業の概況』

文部省がまとめた集団勤労作業のレポートのなかに、宿泊訓練の一例として京都女子師範学校の事例が紹介されています。朝の御陵参拝から夜の精神講話に至るまでほぼ丸一日の訓練でした。なお、午後5時～午後6時半は「夕食」とありますが、「入浴」の誤りでしょう。(中村)

5-4 集合写真：日本国際航空工業に動員された京都府女子師範学校生徒



京都府久世郡大久保村(現、宇治市大久保町・広野町)にあった日本国際航空(現、日産車体株式会社)は、戦中までは航空機(練習機・運送機)を製造しており、戦争末期にはここに京都府女子師範学校・桃山高等女学校の生徒が勤労働員されました。日本国際航空機工場は、1945年(昭和20)7月24日に空襲の対象となり、6名の死者を出しています。(中村)

【報国団の結成】

5-5 教育方針(京都府女子師範学校 桃山高等女学校報国団『校報』所収)

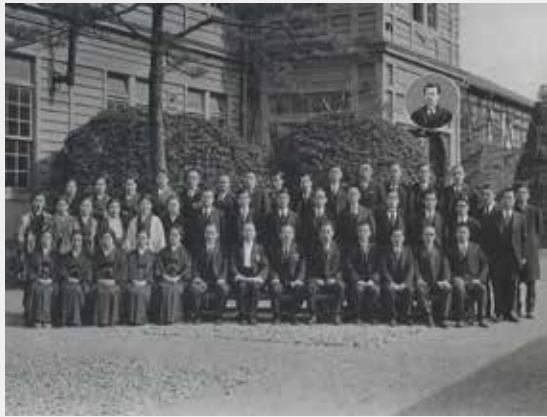
5-6 学校生活(同上)

5-7 京都府女子師範学校・桃山高等女学校報国団員名簿

報国団(報国隊)は、1941年(昭和16)から中等学校以上の学校の全教職員・生徒を対象に組織され、軍事的訓練や集団勤労作業を行う単位とされました。京都府女子師範学校・桃山高等女学校の報国団は、両校校長(兼任)を団長とし、学校報国隊京都地方支部の一員という位置づけです。報国団が発行した『校報』は、「教育の方針」として「国体の本義」に徹すること、質素勤勉の奨励、知能の修養を掲げる他、学校の概要や学校生活も報告されています。また、各団員には、団員の名前・住所を記した名簿が配布されたようで、当時女子師範学校に在学中だった西村美代子氏もこれを手にしていました。(中村)

【京都府女子師範学校の教員と生徒たち】

京都教育大学教育資料館には、1939年(昭和14)と1944年の卒業アルバムが所蔵されています。**5-8・9**は、日中戦争開始前から1年半後のもの。**5-10・11**は、戦時体制が本格的に



5-8 京都府女子師範学校教員 1939年



5-10 京都府女子師範学校教員 1944年



5-9 京都府女子師範学校生徒 1939年



5-11 京都府女子師範学校生徒 1944年

深まった時期のもので、いずれも晴れ姿の様子ですが、よくみると、男性教員の髪型や服装、女子生徒の服装(スカートからもんぺに)などに変化がみてとれます。他には、どんな違いがあるでしょうか。(中村)

5-12 防空訓練の様子

1943年(昭和18)6月、閣議決定された「学徒戦時動員体制確立要綱」により、学校報国隊の待機姿勢が強化され、戦技訓練・特技訓練・防空訓練の徹底が図られました。この写真は、女子師範学校生徒の卒業アルバム(1944年3月)に収載されたもので、消火訓練の様子を撮影したものです。(中村)

(2)西村美代子氏の戦中と戦後

2016年(平成28)、斉藤尚志氏より、京都府女子師範学校の卒業生であり、斉藤氏のご母堂である西村美代子氏の関係資料(全35点)が、京都教育大学教育資料館に寄贈されました。西村氏は1923年(大正12)の生まれで、京都市堀川高等女学校(京都市立堀川高等学校のルーツの一つ)を卒業後、1940年(昭和15)4月に京都府女子師範学校第二部に入学しました(当時17歳)。第二部は高等女学校卒業生を対象とする修学年限2年間の課程で、1942年3月に卒業後、同年4月より京都市立嵯峨野国民学校(41年4月に尋常小学校は国民学校と改称)に赴任しています(当時20歳)。そして終戦を同校の教諭として



5-12

経験。その後は、1948年に結婚、二児の母となり、1962年まで20年間にわたって教鞭をとりました。退職後は、書道に励み、1987年5月には日本書芸院より「師範」を免許され、齊藤未央を襲名しています。

寄贈された資料は、主に西村氏ご自身による記録(日記等)や所有物と、西村氏に送られた手紙からなり、真面目で誠実なお人柄から、仲間や関係者、生徒からもよく慕われていたことがわかります(齊藤氏のお宅には、生徒から西村氏に感謝の意を綴った文章が大切に保管されています)。また日記類には、当時経験した苦労や抱えていた悩み、関心を持った時事問題等が記されています。個々の記事の内容も興味深いものですが、戦争末期～戦後を教員として生きた一個人の歩みを、女子師範学校生徒としての時期にまで遡って追えるという点で、大変貴重な資料といえます。これらの資料のうち、本展では、戦中～敗戦直後を中心に、京都府女子師範学校と関わりの深いものを展示しました。くわしくは、各資料の解説を参照して下さい。



【京都府女子師範学校に入学】

- 5-13 西村美代子近影
- 5-14 京都府女子師範学校 入学許可通知
- 5-15 京都府女子師範学校 入学志願者心得
- 5-16 京都府女子師範学校入学者向け 注意事項

5-13は、京都府女子師範学校の受験に際して撮影されたものです。表情からは緊張している様子がうかがえます(齊藤尚志氏談)。5-14～16は、女子師範学校の入試・入学関係書類です。5-14はいわゆる合格通知で、5-15は入試要項にあたり、1939年(昭和13)当時西村氏が受験した第二部では、学課試験・身体検査・口頭試験の他、音楽・図書・運動の試験がなされたことがわかります。5-16は入学者心得で5-14とセット



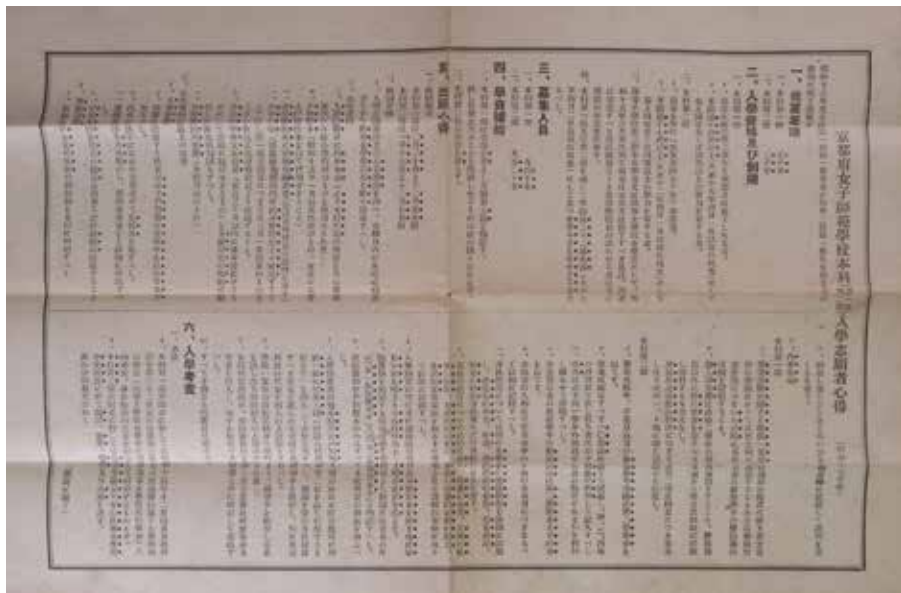
で送られてきたものと考えられます。服装や学用品、宿舎等の案内が記されています。(中村)

【京都女子師範学校在学中の日記】

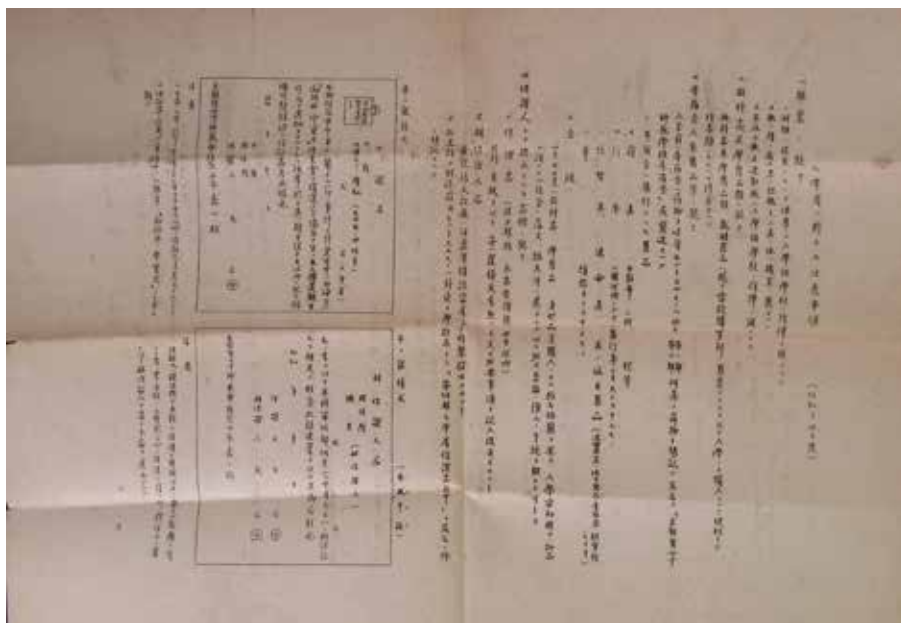
5-17・5-18 『ころのしおり』(西村美代子日記帳)

『ころのしおり』は京都府女子師範学校が配布した日記帳で、これらは西村美代子氏が記したものです。5-17には、入学にあたっての決意を記した最初の記事(1940年4月11日)を、5-18は、卒業を目前にした最後の記事(1942年3月9日)の冒頭部分を掲載しました。これらからは、教師を目指す西村氏の強い思いをみてとることができます。その他の記事には、授業や寮生活での経験、日々の決意や不安など様々なことも書き記されています。当時の学校の様子や生徒の心情を知る上でも大変貴重な資料です。(中村)

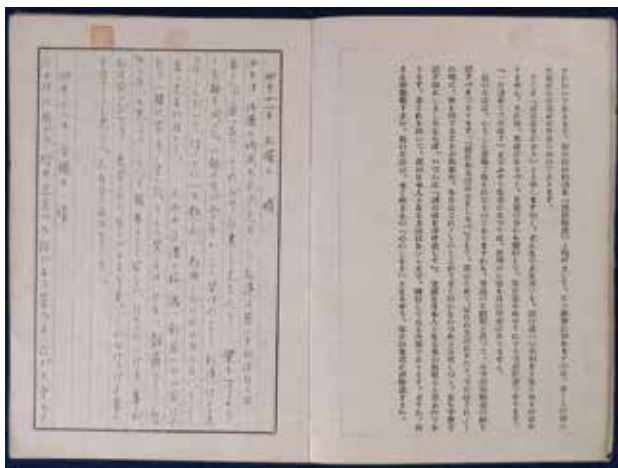




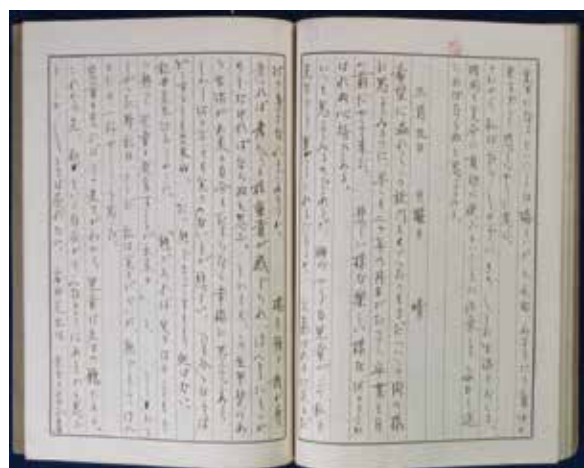
5-15



5-16



5-17



5-18

【京都府女子師範学校での学び】

5-19～5-22 西村美代子写真

齊藤尚志氏のお宅に大切に保管されていた西村美代子氏のアルバムからいくつかの写真を紹介します。5-19は、1940年(昭和15)の夏に二泊三日で行われた水泳訓練の様子です。5-20には、メモに「山作業後」と記されています(撮影時期は不明。「作業」については総論を参照)。5-21は、「京女子師範附属校 3年山田学級の皆さん」とあり、教育実習先の生徒を撮影したものと考えられます。5-22は、寄宿舎の友人との集合写真(西村氏は右から三番目)で寄宿舎の裏庭で撮影されたもの。「お別れを前に」とのメモがありますので、卒業前の1942年のものでしょうか。(中村)

5-23 西村美代子宛手紙(人羅芳男より)

京都府女子師範学校を卒業した西村美代子氏は、1942年(昭和17)4月より京都市立嵯峨野国民学校に赴任しました。しかし、京都にも空襲の被害が及ぶなか、児童は貴船に集団疎開をすることになります。この手紙は児童の受け入れ先となった貴船広屋寮の人羅芳男氏からの便りで、疎開中の児童の様子などを伝えています。(中村)

5-24 敗戦・占領への戸惑い(西村美代子日記帳より)

この日記帳には、1945年(昭和20)5月16～25日の記事(後日の転記か)の後、2頁分の空白に続けて9月22日以降の記事が書き残されています。上に掲載した箇所(10月1日)には、「アメリカ色」となった四条の街の様子や、「決して勝ち誉ったといふ態度も見せていない」「アメリカ人の上品」さを見て、「国家にだまされてみたといふやうな気がする」としつつも、「でも、この考えは間違っているか知らん。子供達にはどう扱ふべきであろう」と自問自答しています。こうした戸惑いは、少し前の9月25日の記事にも綴られており、軍国主義を誤りとする新聞記事をみて、占領軍による検閲を念頭



5-19 水泳訓練



5-20 山作業後



5-21 教育実習先カ



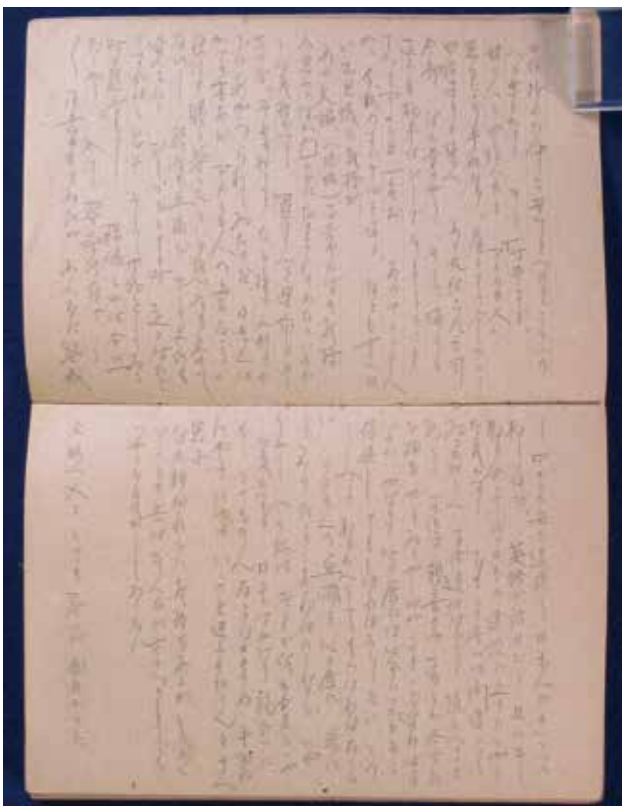
5-22 寄宿舎の友人と



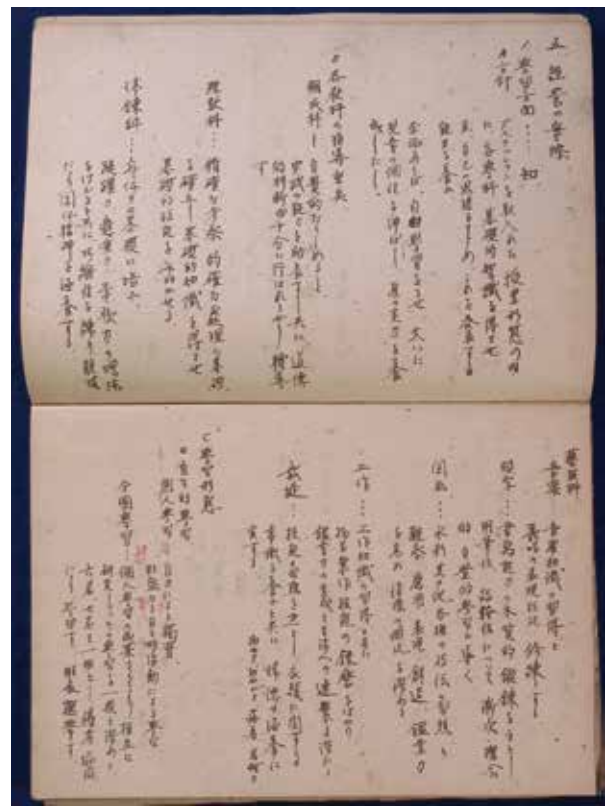
5-23



5-26



5-24



5-25

に置きつつも「日本国って案外だなあ」とし、「何を目標にすすんでいけばよいのか」としています。(中村)

【敗戦後の学級経営】

5-25 『学級経営録』(京都市立九條国民学校5年は組)

5-26 『学級経営録』(京都市立九條小学校6年二組)

5-27 集合写真:京都市立御室小学校6年1組

5-25・26は、西村美代子氏が京都市立九條国民学校(1947年4月より九條小学校に改称)での勤務にあたり作成した学級経営録です。学校や自身の教育目標や方針にはじまり、児童の特徴

やその家庭環境など様々に記録しており、これらを学級経営に活用していたことがわかります。各冊子の末尾には西村氏の一年間の教育を振り返っての反省が記され、西村氏の教育観などを垣間見ることができます。5-27は、1948年度(昭和23)より1957年度まで勤めた京都市立御室小学校の卒業アルバムに収載された写真です。この時は、6年1組の担任でした。(中村)

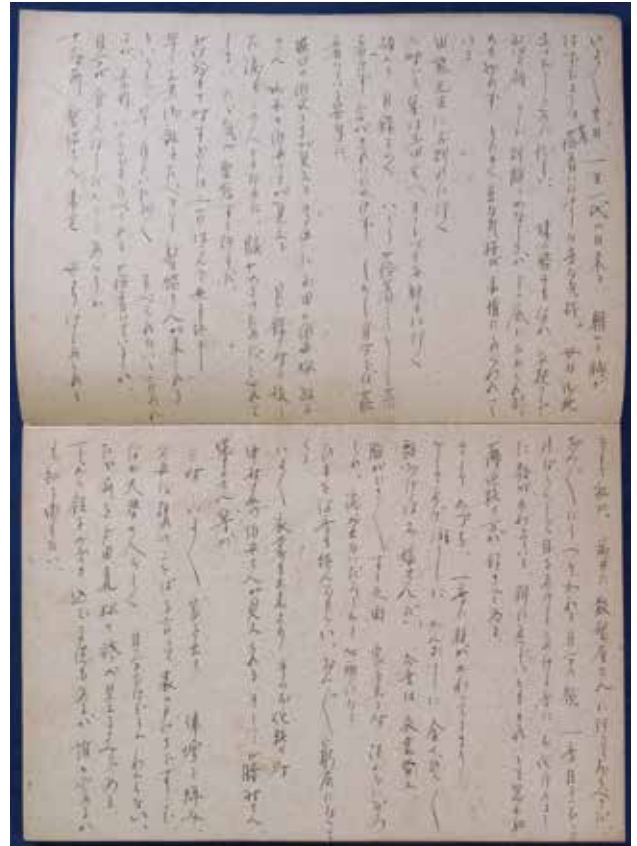
5-28 結婚式当日の記録(西村美代子日記帳)

西村美代子氏は、1948年(昭和23)4月17日に齊藤一三氏と結婚式を挙げました。これはその日のことを記したものの一部です。



5-27

「いよいよ当日、一生一代の日来る。朝から胸がはずむような、案外落着いたような変な気持。」と始まり、「家を出る時、泣かないだろうか」とか、(嫁ぎ先は)「どんなところだろうか」など、様々な思いが綴られています。その後、西村氏は二児の母となり、1962年まで教鞭を執ります。(中村)



5-28

主要参考文献

- ・ 井岡康時 2022 「京都府における郷土教育の展開とその背景」『同志社大学人文科学研究所 社会科学』51 巻 4 号
- ・ 伊藤悦子 1990 「女性教員養成教育に関する論議」『京都府会と教育政策』(株)日本図書センター
- ・ 伊藤純郎 2008 『増補 郷土教育運動の研究』思文閣出版
- ・ 板橋孝幸 2020 『近代日本郷土教育実践史研究』風間書房
- ・ 大串潤児 2016 『「銃後」の民衆経験』岩波書店
- ・ 尾崎ムゲン 1990 「京都府会と府師範学校」前掲『京都府会と教育政策』
- ・ 学校体育研究会 1936 『学校体操教授要目 唱歌遊戯行進遊戯曲譜』成美堂
- ・ 京都教育大学 2001 『京都教育大学百二十年史』京都教育大学
- ・ 京大附属桃山小学校 1988 『京都教育大学教育学部附属桃山小学校八十周年記念誌』
- ・ 輿水はる海 1975 「明治期遊戯の一考察」『日本体育学会大会号』第 26 号
- ・ 輿水はる海 1976 「明治期遊戯の一考察V」『日本体育学会大会号』第 27 号
- ・ 小山作之助 1904 『重音唱歌集』共益商社
- ・ 島津俊之 1998 「師範学校による絵はがきの収集と郷土教育」『紀州経済史・文化史研究所紀要』18 号
- ・ 坪井玄道・可児徳 1907 『小学校体操教科書』大日本図書
- ・ 外池 智 2004 『昭和初期における郷土教育の施策と実践に関する研究』NSK出版
- ・ 原 武史 2015 『大正天皇』(朝日文庫)、朝日新聞出版
- ・ 久木幸男 1980 「郷土教育論争」『日本教育論争史録』第2巻近代編(下)、第一法規
- ・ 逸見勝亮 1991 『師範学校制度史研究』北海道大学出版会
- ・ 三国谷三四郎 1938 『京都府師範学校沿革史』京都府師範学校
- ・ 文部省編 1972 『学制百年史』記述編、帝国地方行政学会
- ・ 和田 健 2021 『経済更生運動と民俗』七月社
- ・ Rietz, Julius. 1874 Felix Mendelssohn-Bartholdys Werke, Serie 14A. Leipzig : Breitkopf & Härtel

展示目録

展示番号	資料名	資料名(収載先など)	年代	所蔵
1. 京都府師範学校女子部の誕生				
1-1	『京都教育大学百二十年史』	—	2001年(平成13)	京都教育大学附属図書館
1-2	京都府庁文書	京都府庁文書(大06-0035)「師範学校」	1917年(大正6)	京都府立京都学・歴史館
1-3	京都尋常師範学校規則	上野家文書(館古603-06725)	1887年(明治20)7月7日	京都府立京都学・歴史館
1-4	京都府尋常師範学校教則(最初の頁)	京都府庁文書(明27-0055)「尋常師範学校一件」	1894年(明治27)	京都府立京都学・歴史館
1-5	京都府尋常師範学校教則(男女のカリキュラム)	京都府庁文書(明27-0055)「尋常師範学校一件」	1894年(明治27)	京都府立京都学・歴史館
1-6	府令甲125号(女学校規則改正)	京都府庁文書(明15-0009-001)「甲号布達原書」	1882年(明治15)6月13日	京都府立京都学・歴史館
1-7	京都府尋常師範学校教則(教科書リスト)	京都府庁文書(明27-0055)「尋常師範学校一件」	1894年(明治27)	京都府立京都学・歴史館
1-8	教科用書追加申請書	京都府庁文書(明27-0055)「尋常師範学校一件」	1894年(明治27)	京都府立京都学・歴史館
1-9	林善助『新体日本歴史』上	—	1888年(明治21)	京都教育大学附属図書館
1-10	文部省音楽取調掛編纂『小学唱歌集』全3巻	—	1882年(明治15)～	京都教育大学附属図書館
1-11	坪井玄道『普通体操法』	—	1903年(明治36)	京都教育大学附属図書館
1-12	集合写真: 京都府師範学校(男女)天長節	—	1895年(明治28)	京都教育大学教育資料館
1-13	「女子師範学校ノ必要性ニツイテ」	上野家文書(館古603-10181)	1892年(明治25)	京都府立京都学・歴史館

2. 女子師範学校の開設と地域

2-1	女子師範学校設置の儀に付き認可申請	京都府庁文書(明41-0041)「師範学校」	1907年(明治40)	京都府立京都学・歴史館
2-2	京都府女子師範学校学則	京都府庁文書(明41-0041)「師範学校」	1908年(明治41)	京都府立京都学・歴史館
2-3	京都府女子師範学校校旗	京都府女子師範学校卒業アルバム	1939年(昭和14)3月	京都教育大学教育資料館
2-4	村雲尼公祝下台臨記念アルバム	—	1917年(大正6)	京都教育大学教育資料館
2-5	「女子師範学校設置の利害」	『京都市出新聞』	1902年(明治35)1月20日	京都府立京都学・歴史館
2-6	京都府教育会「本府師範学校の女子部を拡張すべし」	『京都府教育雑誌』97号	1900年(明治33)5月	京都府立京都学・歴史館
2-7	「女子師範教化近事」	『京都市出新聞』	1908年(明治41)12月26日	京都府立京都学・歴史館
2-8	「新社の女子師範」	『京都市出新聞』	1910年(明治43)4月5日	京都府立京都学・歴史館
2-9	大宮村時代の校舎の跡地を記した地図	『京都教育大学教育学部附属桃山小学校80周年記念誌』	1925年(大正14)	京都教育大学附属図書館
2-10	師範学校、女子師範学校移転反対陳情書	京都府庁文書(大06-0035)「師範学校」	1916年(大正5)9月24日	京都府立京都学・歴史館
2-11	京都府女子師範学校移転に関する京都府知事の見解	京都府庁文書(大06-0035)「師範学校」	1916年(大正5)	京都府立京都学・歴史館
2-12	伏見町長「寄附願」(京都府知事宛)	京都府庁文書(大06-0035)「師範学校」	1916年(大正5)10月30日	京都府立京都学・歴史館
2-13	職員任用之儀ニ付上申	京都府庁文書(大07-0034)「師範学校」	1918年(大正7)3月	京都府立京都学・歴史館
2-14	「大正のころの桃女を語る」	桃山高等学校同窓会・PTA『桃高二十年誌 車石』	1969年(昭和44)	京都府立桃山高等学校
2-15	京都府女子師範学校・桃山高等女学校 学校図書館	—	—	京都教育大学教育資料館
2-16	京都府女子師範学校・桃山高等女学校 学校図書分管簿 裁縫科	—	1969年(昭和44)3月	京都教育大学教育資料館
2-17	西山績(女子師範校長)『追懐』	—	1921年(大正10)9月17日	京都教育大学教育資料館
2-18	女子師範学校伝染病状況報告の件	京都府庁文書(大10-0029)「師範学校」	1921年(大正10)	京都府立京都学・歴史館
2-19	師範学校、女子師範学校伝染病発生に付金品寄贈者に挨拶の件	京都府庁文書(大10-0029)「師範学校」	1921年(大正10)	京都府立京都学・歴史館

3. 皇太子の訪問と女子師範学校の教育

3-1	学科課程表	京都府庁文書(明41-0041)「師範学校」	1908年(明治41)	京都府立京都学・歴史館
3-2	京都府女子師範学校平面図	府庁文書(明43-0020)「皇太子殿下行啓ニ関スル書類」	1910年(明治43)	京都府立京都学・歴史館
3-3	『大正天皇実録』巻3(202頁)	—	2019年(令和元)	京都教育大学附属図書館
3-4	府庁文書(明43-0020)「皇太子殿下行啓ニ関スル書類」簿冊	—	1910年(明治43)	京都府立京都学・歴史館
3-5	皇太子殿下行啓御日程	府庁文書(明43-0020)「皇太子殿下行啓ニ関スル書類」	1910年(明治43)	京都府立京都学・歴史館
3-6	台覧/御巡路各室/配置及ヒ御座所/飾付	府庁文書(明43-0020)「皇太子殿下行啓ニ関スル書類」	1910年(明治43)	京都府立京都学・歴史館
3-7	台覧/御模様	府庁文書(明43-0020)「皇太子殿下行啓ニ関スル書類」	1910年(明治43)	京都府立京都学・歴史館
3-8	授業: 本科第二部第2学年「国民教育ヨリ見タル地理・歴史教授」	府庁文書(明43-0020)「皇太子殿下行啓ニ関スル書類」	1910年(明治43)	京都府立京都学・歴史館
3-9	授業: 本科第一部第2学年歴史科	府庁文書(明43-0020)「皇太子殿下行啓ニ関スル書類」	1910年(明治43)	京都府立京都学・歴史館
3-10	授業: 本科第一部第3学年唱歌	府庁文書(明43-0020)「皇太子殿下行啓ニ関スル書類」	1910年(明治43)	京都府立京都学・歴史館
3-11	歌詞: 皇国之頌	府庁文書(明43-0020)「皇太子殿下行啓ニ関スル書類」	1910年(明治43)	京都府立京都学・歴史館
3-12	楽譜: 皇国之頌	府庁文書(明43-0020)「皇太子殿下行啓ニ関スル書類」	1910年(明治43)	京都府立京都学・歴史館
3-13	授業: 本科第一部第2学年、講習科第2学年体操・遊戯	府庁文書(明43-0020)「皇太子殿下行啓ニ関スル書類」	1910年(明治43)	京都府立京都学・歴史館

展示番号	資料名	資料名(収載先など)	年代	所蔵
4-1	郷土教育連盟『郷土』(1号～)	—	1930年(昭和5)	京都教育大学附属図書館
4-2	郷土教育連盟『郷土科学』(7号～)	—	1931年(昭和6)	京都教育大学附属図書館
4-3	郷土教育連盟『郷土教育』(18号～)	—	1932年(昭和7)	京都教育大学附属図書館
4-4	京都府女子師範学校『郷土教育の概要』	—	1933年(昭和8)	京都教育大学附属図書館
4-5	京都府女子師範学校『郷土研究』(2～8号)	—	1934(昭和9)-1940年	京都教育大学附属図書館
4-6	「郷土教育ニ関スル府下訓導協議会並ニ展覧ニ関スル件」	『京都府公報』603号	1932年(昭和7)11月22日	京都府立京都学・歴史館
4-7	「郷土教育で訓導協議会 女師附属の発表会」	『京都教育』534号	1932年(昭和7)7月	京都府立京都学・歴史館
4-8	「郷土教育訓導協議会 女師附属小学で」	『京都教育』543号	1932年(昭和7)11月	京都府立京都学・歴史館
4-9	明倫尋常高等小学校『我が郷土』	—	1932年(昭和7)	京都教育大学附属図書館
4-10	網野尋常高等小学校『郷土読本』	—	1932年(昭和7)	京都教育大学附属図書館
4-11	中舞鶴尋常高等小学校『郷土調査』	—	1931年(昭和6)	京都教育大学附属図書館
4-12	熊野郡久美尋常高等小学校『久美郷土読本』巻1	—	1933年(昭和8)	京都教育大学附属図書館
4-13	郷土研究室規程	京都府女子師範学校『郷土教育の概要』	1933年(昭和8)	京都教育大学附属図書館
4-14	郷土写真:京都市地方 上京区	—	—	京都教育大学教育資料館
4-15	郷土写真:京都市地方 中京区・下京区	—	—	京都教育大学教育資料館
4-16	郷土写真:京都市地方 左京区・東山区	—	—	京都教育大学教育資料館
4-17	郷土写真:京都市地方 右京区	—	—	京都教育大学教育資料館
4-18	郷土写真:城南地方	—	—	京都教育大学教育資料館
4-19	郷土写真:丹後・丹波地方	—	—	京都教育大学教育資料館
4-20	郷土民家写真	—	1935年度(昭和10)	京都教育大学教育資料館
4-21	絵はかき	—	—	京都教育大学教育資料館

5. 学校・生徒と戦争・戦後

5-1	京都府女子師範・府立桃山高等女学校『時事の葉』第1輯	—	1937年(昭和12)	国立国会図書館
5-2	土井芳子「在支の勇士様」	『京都教育』697号	1939年(昭和14)1月15日	京都府立京都学・歴史館
5-3	文部省『昭和14年10月 集団勤労作業の概況』	—	1939年(昭和14)	京都教育大学附属図書館
5-4	集合写真:日本国際航空工業に動員された京都府女子師範学校生徒	—	—	宇治市歴史資料館
5-5	「教育方針」	京都府女子師範学校・桃山高等女学校報国団『校報』	1941年(昭和16)	京都教育大学教育資料館
5-6	「学校生活」	京都府女子師範学校・桃山高等女学校報国団『校報』	1941年(昭和16)	京都教育大学教育資料館
5-7	報国団員名簿	—	1941年(昭和16)	京都教育大学教育資料館
5-8	集合写真:京都府女子師範学校教員	京都府女子師範学校卒業アルバム	1939年(昭和14)3月	京都教育大学教育資料館
5-9	集合写真:京都府女子師範学校生徒	京都府女子師範学校卒業アルバム	1939年(昭和14)3月	京都教育大学教育資料館
5-10	集合写真:京都府女子師範学校教員	京都府師範学校女子部卒業アルバム	1944年(昭和19)3月	京都教育大学教育資料館
5-11	集合写真:京都府女子師範学校生徒	京都府師範学校女子部卒業アルバム	1944年(昭和19)3月	京都教育大学教育資料館
5-12	写真:防空訓練	京都府師範学校女子部卒業アルバム	1944年(昭和19)3月	京都教育大学教育資料館
5-13	西村美代子近影	—	1940(昭和15)年3月頃	斉藤尚志氏(個人蔵)
5-14	京都府女子師範学校 入学許可通知	—	1940(昭和15)年3月	京都教育大学教育資料館
5-15	京都府女子師範学校入学志願者心得	—	1939年(昭和14)10月13日	京都教育大学教育資料館
5-16	京都府女子師範学校入学者向け 注意事項	—	1940年(昭和15)	京都教育大学教育資料館
5-17	『こころのしおり』(西村美代子日記帳)	—	1940年(昭和15)4～7月	京都教育大学教育資料館
5-18	『こころのしおり』(西村美代子日記帳)	—	1942年(昭和17)1～3月	京都教育大学教育資料館
5-19	西村美代子写真:水泳訓練	—	1940年(昭和15)	斉藤尚志氏(個人蔵)
5-20	西村美代子写真:山作業後	—	—	斉藤尚志氏(個人蔵)
5-21	西村美代子写真:教育実習先か	—	1941年(昭和16)	斉藤尚志氏(個人蔵)
5-22	西村美代子写真:寄宿舎の友人と	—	1942年(昭和17)	斉藤尚志氏(個人蔵)
5-23	石田・西村美代子宛手紙(人羅芳男より)	—	1945(昭和20)年9月4日	京都教育大学教育資料館
5-24	西村美代子日記帳	—	1945年(昭和20)5月～1946年1月	京都教育大学教育資料館
5-25	西村美代子『学級経営録』(京都市立九條国民学校5年は組)	—	1946年(昭和21)	京都教育大学教育資料館
5-26	西村美代子『学級経営録』(京都市立九條国民学校6年は組)	—	1947年(昭和22)	京都教育大学教育資料館
5-27	集合写真:御室小学校6年1組	御室小学校卒業アルバム	1952年(昭和27)	斉藤尚志氏(個人蔵)
5-28	西村美代子日記帳	—	1948年(昭和23)4月	京都教育大学教育資料館



第4回 教育展 先生を目指した女性たち —京都府女子師範学校の歩み—

発行日 令和4年11月11日
発行 京都教育大学教育資料館 まなびの森ミュージアム
〒612-8522
京都市伏見区深草藤森町1番地
TEL 075-644-8537
<https://www.kyokyo-u.ac.jp/museum/>
印刷所 エスフラックスKyoDoデザインスタジオ